

昭和三十六年度

財團
法人

東洋文庫年報

東洋文庫

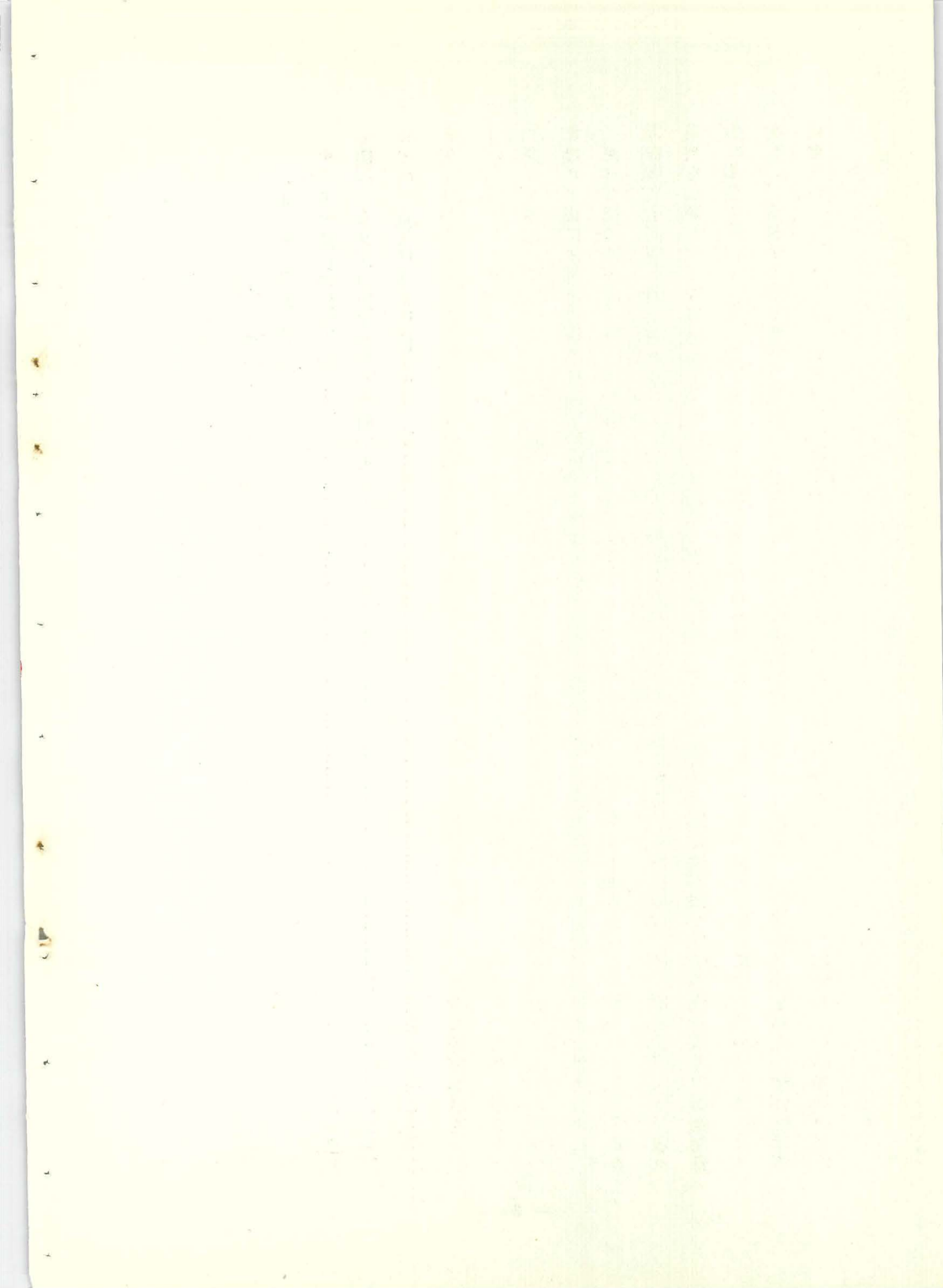
昭和三十六年度東洋文庫年報

目次

一	東洋学センターとしての東洋文庫	一
二	当初の東洋文庫を繞ぐる私の思い出	三
三	昭和三十六年度に於ける東洋文庫	一六
四	職員	二〇
五	事業	二七
1	刊行図書	二七
2	講演会(東洋学講座)	三一
3	研究会(東洋文庫談話会)	六四
4	展示会	七一
5	図書の収蔵及び閲覧	七三
	(A) 資料室	
	(B) 国立国会図書館支部	
6	資料複写	八三
7	情報連絡	八三

六	研究調査活動……………	八五
1	東洋学連絡委員会……………	八五
2	機関研究……………	八六
3	各種研究委員会研究室……………	八九
	第一部 近代現代アジア研究……………	八九
	近代日本研究室……………	八九
	近代中国研究室……………	九〇
	第二部 東アジア研究……………	九一
	敦煌文献研究室……………	九一
	宋代史研究室……………	九三
	明代史研究室……………	九四
	清代史研究室……………	九四
	朝鮮研究室……………	九五
	第三部 中央アジア・イスラム・チベット研究……………	九六
	中央アジア・イスラム研究室……………	九六
	チベット研究室……………	九七

第四部	南アジア・インド研究	九九
	南アジア・インド研究室	九九
4	研究者養成	一〇〇
5	職員の研究業績	一〇一
附(一)	ユネスコ東アジア文化研究センター	一一二
(二)	東洋学術協会	一一二



一 東洋学センターとしての東洋文庫

東洋文庫は、大正六年（一九一七）、故岩崎久弥氏が中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏の蔵書を購入して設けられた東洋学関係の専門研究図書館である。大正十三年（一九二四）に現在地に財団法人として設立せられてより今日まで、研究部・図書部・総務部を設け、(イ)アジア各地域の研究資料を網羅的に収集し、(ロ)東洋学の研究を推進すると共に全国の専門研究者に便宜を供与し、(ハ)各種の貴重な資料の複製を行い、重要な研究業績を出版し、(ニ)あわせて東洋学の普及事業と研究者の養成とに専念してきた。第二次大戦後の経済事情変動のため打撃をうけた東洋文庫は、昭和二十三年（一九四八）図書部が国立国会図書館支部となつて、その維持管理を受けることゝなつたほか、更に民間学術研究機関補助金、外国よりの援助金が寄せられて、研究部の事業と組織体制とを整えてきた。

東洋文庫の特色は、専門図書館としての文献資料センターの機能と、総合的研究機関としての研究センターの機能及び国内的国際的研究情報センターとしての機能を兼ね具えている点にある。東洋文庫は、(イ)一般研究者に対し収集資料を公開し、民間機関としての自由な立場で運営されている。(ロ)一大学、研究機関個々では系統的収集の困難な資料に重点を置いて収集している。(ハ)海外及び地方在住研究者に対しても、マイクロフィルムによる資料複写サービスを行い、収蔵せる貴重資料を覆刻して逐次刊行し学界に提供している。(ニ)一大学、一研究所の枠を越えた総合的研究体制を取つて、各大学、研究機関に跨る流動的共同研究、国際的協力研究を行つている。(ホ)国内的及び国際的研究情

報の交換、通信連絡の衝に当り、我が国の研究成果を広く海外に紹介している。(ハ)我が国東洋学の成果を広く一般に普及し、来日せる海外のすぐれた東洋学者の講演を公開する場を提供し、また貴重な資料を展示する活動を行つてい
る。(ト)東洋学の特殊な専門研究者を養成し、各大学の大学院博士過程修了程度の人材に引続き数年間の研究の機会を
与え、特に比較的未開拓な分野の研究を促進せしめている。人文社会科学の振興が叫ばれ、その方策として総合的研
究センター乃至専門文献センターの設置、整備が唱えられつゝあるとき、従来よりその方向を目指して活動してきた
東洋文庫には、一層内外の期待がかけられている。

二 当初の東洋文庫を繞る私の思い出

原 田 淑 人

わが東洋文庫はモリソン文庫が海を越えてわが国に移つてから四十六年、またそれが上富士前の現地に、東洋文庫の銘を打つて開館するようになってから、もはや三十九年の星霜を重ねた。その間モリソン文庫の約二万四千冊の図書は、すでに五十万冊に増加し、殆んど当初の二十倍に上り、またその刊行物は、邦文論叢を始め無慮百冊を越え、事実上世界の東洋文庫として學術に貢献することに対しては、地下のモリソン博士も定めし満足していることであろう。私は早く上田・白鳥両先生の知遇を辱くし、諸先覺の驥尾に附し、当初の研究員の一人として東洋文庫の恩恵に浴した。然るに今や東洋文庫の設立に尽瘁された諸先生ならびに畏友たちは殆んど仮山の客となり、碌々としていたずらに老骨をかかえた私に取つては、まことに汗顔の至りである。幸に文庫の至宝ともいふべき石田幹之助・岩井大慧両博士が健在して、当初研究員の一人である和田清博士と共に、相変らず東洋学の指針として活躍しておられることは、すこぶる意を強うするに足りるのである。現在文庫は益々隆運に恵まれ、多士濟々研究の分野を拡大し、世界の東洋学界に立つて何等の遜色を示さず、スエズ以東に於ける東洋文献の一大宝庫たるの名をはずかしめないことは、わが国の大に誇りとするところである。

さき頃東洋文庫年報の編集係から文庫当初の思い出を求められたが、何分にも年老い、記憶も覚束かないし、その

上ノートらしいものは戦災の厄に遭つて全く烏有に歸した現在、多くの誤謬を伝えることと恐れるが、編集係の御好意に甘え、ここに覚束ない記憶をたどつてあれこれ綴つてみることにした。さきに文庫の生字引ともいうべき石田博士は文庫の生い立ちについて事細かく手に執るよう記述された。私はそれとは違い、ただいつも外にいて、たまさか文庫に足を入れるに過ぎなかつたから、もちろん文庫の内部のことなど知つてゐるはずがなく、私の思い出も直接文庫とは関係なく、きわめて皮相の観を免れない節も多いことと思う。ただ東洋文庫を背景として、文庫設立当時の東洋史界の状況について思い起すままに書きなぐつたまでである。

私は文庫の基盤を作つたモリソン博士とは一面識もなかつた。ただ中国北京に遊び、王府井大街を散歩する毎に、それがモリソン・ストリートの別名を負つてゐる程、中国文化の恩人であつたことに感歎せざるを得なかつた。殊に王府井街の西側に沿つた料理店安福樓で食事をする時など、かねてここがモリソンの旧邸であることを聞かされていたので、縁かりを書いた鴨居の扁額を仰ぎながらそぞろに故博士の業績を懐い、また若き日の才物石田博士が文庫の購入から、荷造りして東京へ送り出すまでの苦心の程を偲んで、杯を挙げることが一度や二度ではなかつたのである。

モリソン文庫の購入はもちろん岩崎久弥男爵の大英断による賜であるが、当時の碩学上田・白鳥両先生の遠大な志慮の致すところであることも改めて言う要もあるまい。私が東大文科大学史学科に入學したのは、わが国が日露役に戦捷を収めた明治三十八年であつたが、この時變を契機としてわが東洋史学の趨勢に大變革を來たしたのである。日露役以前にはわが国の東洋史はなお旧漢文学の旧殻を脱することができず、史学の名の下に主として中国本土の史実

を詮索することに力めていた。然るに明治三十六年白鳥先生はヨーロッパ留学から帰朝された翌年から東大史学科に兼任教授としてアジア塞外史を講ぜられた。私の入学した三十八年は先生齡四十を一つ越えられた最も油ののつた時であつたが、私達学生からは餘程御年配のたけた教授のように見受けられた。その時の先生の抱負はまことに大なるものがあつて、東洋史はひとりシナ史ばかりで成立するものではなく、東洋各文化相互の連結でなければならぬ、そしてそれがかけ橋となるべきものはシナ塞外民族でなくてはならない。従つて東洋史学を修めるものは視野を広くしなければならぬ。それについてもわが東洋学者は互に團結して欧米学界の好敵手を迎えねばならないと、時に触れ事に応じてわれわれ学生を鼓舞されたものであつた。先生は帰朝後、直ちに東洋研究の一日も忽にしてはならないことを当時の学界に強調されたが、その時はまだ先生の予期されたような反響がなかつたので、その貫徹を寧ろ後進の養成に託されたものと推察されるのである。私の拝聴した先生最初の講義は大月氏に関する諸問題で、殊にカニシカ王の年代論については、精確な考証をかざして大に熱弁を振われ、学生の研究熱を煽つた。また一方市村瓚次郎先生はシナ史に独自の見解を持たれ、白鳥先生と相共鳴し、東大に於ける東洋史学の境域を脱して全く面目を一新したのであつた。かくして東洋諸文化の連絡に風媒虫媒の役割をつとめた塞外諸民族の研究は学界に大ブームを巻き起し、先生の講筵に侍して熱心に先生の天馬行空的論調に耳を傾けていた学生には、今西竜・浜田耕作・池内宏・箭内互（大学院学生）山下寅次・加藤繁・羽田亨・大谷勝真・橋本増吉等の他日東洋史学の各分野に活躍した青年学徒の群像がいた。これ等の群像こそ他日東洋文庫の黎明に羽ばたいた人々であつた。私も幸にこの講筵の末席を汚すことのできたことは生涯の光榮とするところである。当時東大東洋史にたずさわるものの中には、平素の話柄にも西

域史の史実が上つていた。浜田先輩は池内先輩をつかまえて、折から夏草の茂る校庭に立つて、「君、張鷟が土産に持つて来た首宿はここに繁茂するクローバ（うまごやし）かも知れないぞ」などという会話も聞かれ、また市村先生などもこのブームに引き込まれ、高田馬場の新邸を披露されて、「江戸川をタリーム川だとすると目の白鳥君の住居は疏勒にあたり、私の新居は亀茲あたりになるだろう」などといわれた。時に新たに帰朝された先輩中山久四郎博士は後に触れる東洋史談話会に出席して、盛んに恩師ヒルト博士の東西文化交流史を振りまわされたが、中山博士御自身の書かれた「水菓子屋店頭に於ける史的觀察」といつた論文の抜刷を一同にくばり、この方面の興味をわれわれに沸かしめたものであつた。東洋文庫は実に日露戦捷の余をうけた斯うした時勢に生まれたもので、全く白鳥先生の遠大な志慮に基くものといつても過言ではあるまい。

東洋文庫の開館を前にして、大正十一年だと思ふが、白鳥先生はヨーロッパに出張され、図書の蒐集にも骨を折られた。丁度私は留学中であつて、先生のお伴をしてロンドンやベルリンの書店を漁つたことがあつた。ロンドンでは古本屋の地下室に、土をかぶつて堆く積み上げられた古本の山から、宣教師の東洋紀行などの稀観書を掘り出したことなどあつた。ベルリンでは先生ボツツダム・ストラーセに宿をとられ、何人にも宿を知らせないで、時に私を伴つて附近のレストランでお好きなビーフステーキに白葡萄酒を傾けられた。その頃は先生帰朝の日も遠くないので、大急ぎでトルコ人を雇つてベルシア語のステッペンデを取つておられた。たしか十日ばかり立つた時であつたが、私はベルシア語の進度を伺うと、先生下総弁まるだしで、「最早やていげい（大概）分つた」といわれた。語学に対する先生の天才的頭脳には今更らながら驚かざるを得なかつた。ベルリン滞在中、先生はルコック教授を尋ねられたが、

その前にあらかじめ私はルコック博士に打ち合せに赴いた。するとルコック博士は白鳥先生のようなえらい人に遭うのはうれしくもあり恐ろしくもあるといわれた。それは単なる儀礼的なお世辞でなく、全く喜悅と敬意から出た言葉だと私は見て取った。先生ヨーロッパ旅行中ブダペストに旧友クノシ博士を尋ねる予定で、同氏にも通知してあつたが、ついに旅程の都合で約束を果すことができなかつた。その後私はブダペストに旅行し、クノシ博士にお会して白鳥先生のお言伝てをしたところ、博士は白鳥先生の当時の写真を机上に置いて、先生のおいでにならなかつたことを非常に残念がられていた。その時の私の話の序でに、クノシ博士は先生が始めてブダペストに見えたとき、観迎会での挨拶に、いきなり流暢なハンガリ語でなされたことを思い起して、往時の追憶に耽けつていた。帰朝後その事を先生に報告したところ、「いやそれは前以つて準備しておいたのさ」と何気なくいわれたが、これも先生が語学の天才であつたことを物語るものであろう。私は白鳥先生にお伴してヨーロッパの東洋学者が中央アジアからそれぞれ本国にもたらして行つた絵画その他の遺品を見て廻つたが、その折かねて心がけていた唐代の服飾を、西域発見の絵画から取材して、何か一つ纏めようと考えていたので、その事を先生にお話すると、先生言下に賛成されたのみならず、写真の蒐集費まで即座に恵与されたのでルコック氏やペリオ氏等の激励と相俟つて、まことに粗末ながら文庫論叢第四ができあがつたのである。

自分のことばかりお話しして申訳けないが、それにつけても思い浮ぶのは、大正七・八年頃私が東大の一講師であつたとき、私は唐代の服飾について興味を感じ、それを纏めてみようと思つたので池内博士の口添えて、東大文学部紀要の一として実現することにして、これを時の文学部長上田先生にお謀りしたところ、先生はただうなずかされただけ

であつた。その頃文学部にはもちろん出版費の用意などあつたわけではなかつたので、私は半あきらめていた。すると半年ばかり立つて、学部の教授主任をやつていた大島正徳君から、君、出版までの研究の用意ができたかとの注意に、私はまだ学部長からの御許可がないから心配しているのだという、と、大島君は、いやあの時上田部長は「ウン」とうなずかれたではないかとのことであつて、おかげで不完全ながら紀要の一冊ができたのである。上田先生にしても白鳥先生にしても私のまだ何もできていない空の計画に対し、即座に援助の手を差し延ばされた寛量にはつくづく感銘した。東洋文庫の出版物に千里馬的名論文の陸續集つて来るのも、両先生の遺志の一貫が然らしめるものであらう。

私が文庫をお尋ねすると、三階の南の室に上田先生、同階の北の室には白鳥先生がおられ、いつも研究にいそしみまた用務に追われておられたにも拘らず、両先生ともいつも温顔を以て迎えられた。この間にあつて白鳥先生は無頓着な性格を持つていて、そのためいろいろな挿話を造られていた。研究に熱中されている先生は、文庫所蔵の図書を研究室に取り寄せられる折、時には題名をおつしやらずに、何色の表紙の、何々の挿絵のある書物などと命ぜられることもあつたという。しかしそこは文庫の図書を隅から隅まで知り抜いている博覧強記の石田博士がおられたこととて、先生所要の図書は時を移さず先生の机上にもたらされたのである。私は上田・白鳥両先生の人物の偉大さが文庫を文庫たらしめたことを確信するが、同時に今日健在の石田博士の甚大な労苦が一枚加わつてこそ、始めて美果を結んだものと信ずるのである。

次に東洋文庫に関連して一言触れて置きたいのは、文庫と前後してあらわれ、しかも文庫関係の先覚によつてもり

立てられた学会や學術機関についての思い出である。私として真先きに挙げてみたいのは、前にも一寸触れた東洋史談話会である。この学会は私どもが学生であつた明治三十九年に生れたものであつて、もと市村・白鳥両先生を囲んでの学生だけの会合であつて、ただ大学院学生は仲間に入れることにして發足した。会場はいつも東大山上會議所があてられ、松本という盆栽好きの小使さんの世話になつた。会は学生がかわりがわり当番に立ち、會議所備え付けの帳簿に食事あり食事なしの二項目があつて、そのどちらかに記入した。食事ありというのは他からいわゆる洋食が入り、食事なしというのは、小使さんの世話で、幾皿かの寿司が用意されるのであつた。談話会は大抵この食事なしの場合に属し、前に記した白鳥先生教室の群像などの連中が寿司をつまみながら、両先生から教室以外の教導に預つた。この会には不文の規則があつて、毎卒卒業生一人が順番にそれぞれの研究の一端を發表する例となつていて、これに應じない卒業生は自然会に出席できない悲運をさえ見なければならなかつたので、お互に勉強して来たものであつた。実は私も卒業ほやはの時順番が廻つて来た。市村先生は心配されて、私の卒業論文「明代の蒙古」の一節でも話したらどうかと注意されたが、私は思いきつて折から調べていた「唐代女子化粧考」という、後に東亜古文化研究に収めた未熟な講演をやつてみた。幸その頃斯うした研究がなかつたので、この私の処女講演は両先生や箭内先輩等からお褒めに預つた。自分のことを例に取つて申訳もないが、東洋史談話会はかくして後進奨励の道場ともなつたのである。この会は私の一年前の先輩羽田博士や同期の大谷・橋本諸兄の發起で生れたが、私は病気で第一回の談話会には参加できなかった。それにしてもこの会最初の会員としては殆んど私が唯一の残りものであるかも知れない。まことに感無量である。東洋史談話会はその後間もなく幣原坦先生その他津田左右吉・中山久四郎諸博士の参加

を得、爾來會員は益々増加し、今や儼然たる在京東洋史学者の会合として、すでに幾百回を重ねているが、これもまた白鳥先生遺徳の然らしめるものであらう。

明治四十一年桂公爵を会長とする東洋協会に新たに調査部が設けられ、平田子爵が部長となり、機関誌として東洋学報が刊行され、東洋史学研究に大きく拍車がかけられた。この研究機関はその実白鳥先生の徳憑によるもので、成立後は先生が主宰者となり、池内・浜田両先輩が編集主任となり、先生の「西域史の新研究」を始め幾多の創見に富む名論文が掲載され、その研究範囲は殆んどアジアの全域に亘り、世界に於ける東洋史学に貢献するところ多大であつて、わが東洋史学の名声は中国を始め欧米諸国に轟いたのである。現在学報は東洋文庫内の東洋学術協会の機関誌として光彩を放つていることも、白鳥先生遺業の一であつて、東洋文庫と因縁浅からぬことを物語つている。当時東洋学報の原稿料は他のそれに比べると格段の高額に上つていて、昔も今も変らぬ懐の暖かならぬ学者に取つてはこの上なき福音であつた。磊落な今西博士が白鳥先生に述べられていた謝辞にいわく、「早速女房に見せてどうだといつてやりました」「お蔭で欲しかつた日本書紀通釈も買うことができました」と。つい余計なことを覚えていて申訳ない。

また東洋学報の刊行と殆んど時を同うして南滿洲鉄道会社に歴史調査部が設けられ、白鳥先生が主任となり、滿洲並に朝鮮の歴史地理的調査研究が行われ、最後七年間に五巻の報告書が出版された。その後大正四年に至つて、その事業は東大文学部に継承され、白鳥先生は相変らずその面倒を見られ、池内・箭内・松井(等)・津田諸先覚の手によつて調査が進められ、滿鮮地理歴史研究報告に有益な論文が発表された。これまた東洋文庫と血縁のつながる学会であつた。

なお直接には文庫と関係はないにしても、学問の上からは離れることができなく、また東洋文庫に負うところ少くなかつた東亜考古学会に触れて置きたい。私は大正十年これも上田・白鳥両先生の斡旋によつて文部省在外研究員として欧米に留学した。同十二年に帰朝したが、時恰も関東大震災の直後で、東大文学部は焼失し、折角帰朝したものの、図書もなく標本もなく、何等教材の利用すべきものがなかつたので、考古学の講義を明年に延期するのやむなき始末となつた。当時帰朝の意気盛なのにかまかせ、この休暇を好機として中国に遊び、彼の国の学者と提携して、東亜考古学の共同調査を計ろうとし、これを京大の長友浜田博士に相談し、大に賛同を得、私は一足先きに北京に赴き、浜田博士を彼地に迎えることにした。この頃南滿洲鐵道会社の大連図書館長を辞して帰朝していた法学士島村孝三郎君もまた同一意見を持ち、その時の対支文化事業部長の岡部長景子爵と計つてわれわれの計画を援助することとなり、島村君もまた続いて北京に到着し、とりあえず河南省安陽県の殷墟を中日共同調査の好課題と考え、北京に滞在の同じく滿鉄関係で地質研究者の小林胖生氏と同道、一行四人で同地を見学した。しかし中日学者の提携は寧ろ滿洲方面の遺蹟調査こそ最適課題であることに気付き、われわれの北京滞在の間に、北京大学の馬衡・沈兼士等考古学関係の諸教授と協議を凝らし、日本側に東亜考古学会を起し、これと北京考古学会とが協同して東方考古学協会を設立して事に当ることに議決した。時まさに大正十四年であつた。そして翌十五年浜田・島村両兄が北京に赴き、正式に東方考古学協会の発会式を挙げた。

東亜考古学会の設立と関連してここに思い起すことがある。私が北京に赴いている間に、東大文学部では、黒板・村川両教授の発案で、細川護立侯爵からの助成を得て、朝鮮楽浪郡の漢墓の発掘を計画し、その実行を私に委嘱し

た。私は中国からの帰途倉惶朝鮮に赴き、幸にも、後漢の五官掾王盱墓を掘り当て、漆器類を始め完全な遺物多数を
獲得した。なおこの発掘事業を好機として馬衡教授の来鮮を求め、ここに中日考古学徒の親交の道が開けたのであつ
た。また前記楽浪遺物全部は一旦東京に齎らされたが、東大考古学の仮研究室はこれが整理に当てる面積がなく、し
かも水を多く使用しなければならぬので、その始末に困つていたところ、東洋文庫の好意によつて、文庫地下の一
室を借用することができ、一処に調査に當つた田沢金吾君や小場恒吉君など毎日ここに通つて来て、整理も一応目鼻
がついた。右遺物が文庫に置かれていた間に、今上陛下がまだ摂政宮であらせられたとき台覧を賜い、またスエー
デン皇帝が皇太子としてわが国を訪問された際、文庫に歩を運ばれて熱心に御覧になつた。これ等はまた文庫が學術に
協賛を吝まない一面を表わしたもので、私にとつて忘れることのできない記憶である。その後馬衡・沈兼士・劉復等
諸教授の訪日があり、彼我協同の調査が行われ、わが東洋学者の満洲蒙古・北シナ等に於ける活躍は同学会刊行の甲
乙兩種の東方考古学叢刊の示すところである。時はやや遅れるが、昭和八・九年の両度にわたり、同学会の行つた北
満牡丹江の上流渤海国上京竜泉府址の発掘調査の如き、わが池内・鳥山（喜一）両兄や金毓綏氏など内外の渤海学者
を網羅して特に歴史班をつくり、われわれ発掘班と合せてこれに従事したが、この遺蹟の選ばれたのは、かつて白鳥
先生が滿鉄の委嘱を受け、北滿旅行の際、親しく現地に立ち寄り、唐草模様の方磚などを将来されたことが一動機と
なつたのである。東亜考古学会はつねに文庫との關係が絶えなかつたが、昭和四年に私が島村君と共に南京方面を視
察したとき、偶文庫の委託をうけ、商務印書館主張元濟氏を介して劉承幹氏の宅に宋会要の稿本を見学した。そして
徐松が永樂大典から抜き取つた会要原書のうち食貨と蕃夷との部分の筆写を依頼し、数年後文庫に収めることができ

たのも忘れ難い一紀念である。

明治三十七・八年後を契機としてわが学界の視野は東アジアの各地に拡大され、その文献的研究はいうまでもないが、実地の踏査の重要であることが一般に認識されるようになり、鳥居竜威・関野貞諸先覚の尽力によつて満鮮方面の考古学的調査が進められ、殊に朝鮮旧総督府の調査の如き、関野博士を始め黒板・浜田・今西・池内その他諸先覚や畏友たちが参加し、多くの研究成果を挙げたことは周知の如くである。それについて思い浮べることがある。それは上田先生が東洋史談話会に於ける講演の折、近来東洋史学の諸君が盛んにアジアの地名を羅列するが、その地が東經何度北緯何度にあるか、もつと精確な知識を持たねばならないと警告されたことである。實際シナ史を読むものは地名など漠然と読み過ごしていたのであつたが、戦役後満鮮方面の地名も漸く常識的となつて、新聞紙上でも親しくなつて来た。しかし満鮮方面の歴史地理的調査も兎角既成の地図に頼る外はなかつた。その後実地踏査・考古学的発掘の進歩と相待つて、歴史地理の研究や記述に精確さを加え、上田先生の警告も漸く酬いられた観がある。

東洋文庫に血縁のつながる学会や研究機関は他にも存在するであろう。上叙のものはただ私が何等かの関係をもち、その恩沢に預つたもののみについて記憶をたどつただけである。これ等の学会は殆んどすべてに亘り、直接間接に白鳥先生の息のかからないものはなく、わが東洋史学の発達に基礎を置かれた先生ならびに諸先覚の業績は、東洋文庫の儼存するかぎり、永久に仰慕されることであらう。

文庫創立前後に於ける東洋史学の趨勢と、わが文庫関係者の活躍について以上極めて粗略ながら記憶を呼び起してみた。東洋文庫自身の事業とその成果に至つてはまことに筆紙の尽し難いものがある。文庫創立以来次の抱負とその

実現とにつとめて今日に至っている。(1)東洋学に関する優れた研究業績の出版。今日文庫刊行の邦文論叢だけでもすでに四十冊を越えているが、設立当初に於いて、すなわち大正十三年から同十五年にかけ、忽ち六冊の出版を見た。うち私の一冊を除いては何れも論叢名著の先鋒をつとめたものである。白鳥先生はかつて私に次のように語られた。それは善く売れる書物なら何処の本屋でもすぐに引き受けてくれるが、内容がいくら優れていても、売れない本となると、空しく筐底に埋もれてしまうのである。文庫はつとめて斯うした売れそうもない優秀な研究を世に送るのであることであつた。先生の遺志は一貫して今日の文庫刊行の書物にも認められる。(2)欧文紀要の刊行。大正十五年(一九二六)に第一巻が刊行され、今日すでに二十一冊をかぞえ、世界の学界に重きをなしている。先年スエーデンのシレン氏から私に *The Interchange of Eastern and Western Cultures as Evidenced in the Shūsōin Treasures* という君の論文の載っている文庫の紀要を贈つてくれとの手紙が来た。実は私はそんな論文を書いたか覚えていなかった。文庫に確めたところ、紀要の第十一巻に載っていることが分かつて、文庫から送つて頂いた。私自身忘れていたような論文でも、それが欧文でかかっていると、ヨーロッパの学者に注意されたのである。いわんや文庫紀要掲載の名論文の欧米学界に謳歌されるものは数多いことであろう。白鳥先生が世界の学界に研究の好敵手を求められた本志も遺憾なく達成されたものといえよう。(3)重要な典籍の複製と研究。東洋学研究に必要な文献が徒らに秘蔵死蔵されることは學術のために忍び難いものであつて、これが複製を行い、広くその利用を計るべきことは誰しも認めている。三十七・八年戦役後多くの機関から競つてその実行を見たが、不幸にして永續するものがなかつた。然るに東洋文庫のみは今日まで挫折せず、陸統稀観書の複製が回を重ね、研究者を益しているのである。文献によつては、

わが国にはその研究者が一・二に過ぎないものであつても、世界同学の士に寄与するところがあれば、その労力と経費とを吝まないで、これまた白鳥先生のかねての持論であつて、わが東洋文庫の世界的性格を帯びるゆえんでもある。(4)東洋学講座を通しての専門知識の普及。これも白鳥先生の大に力を用いた事業であつて、先生親から講師として屢々壇上に立ち、常に斬新な研究を発表して聴講者を心酔せしめたものであつて、講堂は毎に満員の盛況を呈した。かつて先生の講筵に侍した面々も欠かさず列席し、講演終了後も別室に先生を囲んで史談に耽り、帰途も必ず先生を擁し、文庫の前の路地を抜けて駒込駅へ向うのが例であつた。近頃私は時たま文庫の講座に御邪魔するが、その都度、講演の範囲が拡大し、特にわが少壮気鋭の学者が親しくアジアの各地に足跡を印し、かつては東洋探検家を通して聞き取っていた、夢路のようなシルク・ロードなども、わが国学者がスライドによつてまのあたりわれわれに指示されるのであつて、まことに隔世の感に堪えない。

私はわが国に於いて他に比類をゆるさない二大宝庫を認めるものである。その一は奈良の正倉院であり、他の一はわが東洋文庫でなければならない。正倉院はひとりわが奈良朝の文化を示すのみならず、広く八世紀に花を開いた世界文化の淵藪であつて、中国を始め欧米人の均しく敬意を払うところである。わが東洋文庫もスエズ以東に於ける唯一の東洋文献の宝庫として世界の識者の敬愛を集めるゆえんのものには敢えて繰り返して説明する要もないのである。私が文庫を以て正倉院宝庫に比較することも決して誇張の言ではあるまい。

三 昭和三十六年度に於ける東洋文庫

昭和三十六年度における東洋文庫の一般事業は、前年に引続き文部省大学学術局を通じ日本政府から、またハーワード・エンチン研究所、ロックフェラー財団、東洋文庫維持会の諸機関及び各位から、補助金並びに援助金を受けて行われた。

文部省補助金による出版物としては、「東洋文庫欧文紀要・第二十一」「東洋文庫叢刊第十六・欽定西域同文志・中」が刊行され、講演会は春秋二期十二回、ナポリ東洋大学学長マルチェロ・ムッチョーリ氏を含む十二講師による「東洋学講座」を公開し、研究会としては、高麗大学李弘植教授、ライデン大学フリッツ・フォス教授、グーテンベルヒ大学ヘルムート・シール教授及びパリ大学ルイ・バザン教授を囲む特別講演会を含む八回が行われた。「東洋学講座」の秋期は漢代史特集として、同一時代の研究者による連続講演の形式を採つたことと、研究会においても二回を清代郷紳をテーマとするシンポジウムに充てたこととは、本年度の新企画であつた。展示会は史学会第六十回大会に協賛して、十一月十一・十二日、東アジア言語関係辞典類を展示し、国立国会図書館の援助を得て解説目録を印行した。購入図書は単行本・和漢朝鮮書三五七冊、洋書一四五冊、定期刊行物・邦・華・朝鮮文四八、欧文三一八、受贈資料は単行本・和漢書五三〇、洋書三九七、逐次刊行物・和漢書二四九九、洋書八七一冊に及んだ。研究者養成としては文部省補助金による研究生二名の他、ハーワード・エンチン研究所資金によるもの五名がある。

文部省科学研究費交付金による研究としては、三十四年度以降行われてきた機関研究「中世以降における東アジア諸地域の貴重文献の整理研究」のほか、前年度来アジア地域総合研究として行われてきた「イスラム社会の構造」が、機関研究Bとして進められ、図書、マイクロフィルムが蒐集收藏せられた。

人事面では、理事小倉正恒氏が、昭和三十六年十一月二十日死去せられた。慎んで生前の文庫に対する御厚誼に感謝すると共に哀悼の意を表する。又研究部顧問兼東洋学連絡委員会委員津田左右吉博士は、同じく十二月四日死去せられた。博士の多年に亘る我が国東洋学史上不滅の業績に対して敬意を捧げると共に、文庫創立以来の御尽力に感謝を捧げ、深く哀悼の意を表する。なお研究部長・専務理事榎一雄氏は、ユネスコの援助によりラテンアメリカにおける東アジア研究の基礎を作るため、メキシコ学院の要請に基いて昭和三十七年二月から六月迄、講議のため出張している。本年度、理事として新たに松本重治氏を迎え、又兼任研究員として松本信広、梅原末治の両氏を依頼した。研究員高島稔氏、同永積昭氏は、夫々ロンドン大学及びコーネル大学に留学。研究生岡田英弘氏はワシントン大学留学より帰国。研究生斯波義信氏は昭和三十六年四月付を以て熊本大学法文学部助教授に、同西田守夫氏は九月十五日付を以て東京国立博物館学芸部考古課技官に、同池田温氏は十一月一日付を以て東京大学助手（文学部東洋史学科）に夫々転出、同島海靖氏も四月付東京大学教養学部助手に転出されると共に十二月付を以て兼任研究員を依頼せられた。

昭和三十六年度において特筆すべきは、「ユネスコ東アジア文化研究センター」(The Centre for East Asian Cultural Studies) が本文庫に付置せられ、その行うべき事業計画の立案のため国際会議「東アジア地域研究機関代

表者及び専門家会議」(International Meeting of Experts and Representatives of Research Institutes in East Asia) が開催せられたことである。(詳細は「ユネスコ資料」日本ユネスコ国内委員会、昭和37年3月、参照) 本センターはユネスコの「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」に基づく学術的調査及び研究を担当するもので、近く設置せられる予定の南アジア・西アジアのセンターと並んで当該地域の文化を代表する高い水準の研究機関を指定し、各センター相互、及び各担当地域内の研究機関や研究者と連絡して学術研究の地域的協力組織を作り、研究成果、情報、資料、人材の交換、共同研究を行うものである。東洋文庫は、従来ともその重要な機能の一つとして、国際的学術情報センターたる役割を担ってきたが、ユネスコ文化研究センターの設置はこの機能を飛躍的に拡充し、独立強化せしめたものと云いうる。センターは昭和三十六年(一九六一年)七月一日よりその事務を開始し、九月二十八日、東洋文庫において国際会議開会式を兼ねて開所式及びレセプションが挙行せられ、所長には辻直四郎氏、副所長には榎一雄氏が就任、会議には、主催者側としてパリ・ユネスコ本部より派遣せられた文化活動局次長朝吹三吉氏、文化活動局哲学人文科学課長 N. Bannatei氏、日本ユネスコ国内委員会事務総長武藤義雄氏、及び所長・副所長。各国代表として、カンボジアの Lyée Sisomath の Duch Phan 氏、中国・台北大学の Hu Nai-an 氏、韓国・延世大学の Choy Dong 氏、フィリピン・フィリピン大学の Leopoldo Y. Yabes 氏、タイ・Chulalongkorn 大学の Prachoom Chomchai 氏、ベトナム・駐日ベトナム大使館文化アタッシェ Hoa Duc Vuong 氏、日本・早稲田大学の一又正雄氏、東京大学の石田英一郎、岸本英夫、前田陽一、尾高邦雄、山本達郎の各氏、日本大学の岩生成一氏、京都大学の長尾雅人氏、アジア経済研究所の東畑精一氏が参加。又、各方面関係者として、フ

ランスの Louis Basin 氏、イントの R. N. Dandekar 氏、ホンコンの F. S. Drake 氏、フランスの V. Eliséeff 氏、デンマークの L. L. Hammerich 氏、ノルウェーの G. Morgenstjerne 氏、チェコスロヴァキアの J. Prusek 氏、ドイツの H. Scheel 氏等が参加せられ、なおオブザーバーとしてハワイ大学東西センター所長 R. N. Anderson 氏、スタンフォード大学東京分校長 J. D. Goheen 氏をはじめとする在日外国人 8 氏、日本人 8 氏の参加を見、九月二十九日より十月二日迄、高輪プリンスホテル国際会議場を会場として、研究センターの在り方、三十六年度事業計画、関係各国における東洋学研究の現状及び研究機関に関する情報の交換、将来の事業計画等をめぐつて熱心な討議が行われた。その結論とそれに基く事業の概要は巻末付記の如くである。

三 職 員

理事會

理事長

細川護立

(文化財保護委員會委員)

專務理事

榎 一 雄

(財団法人東洋文庫研究部長 東京大学教授)

理 事

有 光 次 郎

(株式會社吾孀製鋼所取締役會長)

岩 井 大 慧

(国立国会図書館支部東洋文庫長)

小 倉 正 恆

(昭和三十六年十二月死去)

澁 沢 敬 三

(日本民族學協會々長 國際電信電話株式會社社長)

德 川 宗 敬

(日本博物館協會々長 日本図書館協會顧問)

松 本 重 治

(國際文化會館專務理事)

山 本 達 郎

(東京大學教授)

和 田 清

(日本學士院會員 東京大學名譽教授)

岡 東 浩

(東山農事株式會社常務取締役)

石 黒 俊 夫

(三菱地所株式會社社長)

磯 野 長 藏

(株式會社明治屋本店社長)

梅 原 末 治

(京都大學名譽教授)

評議員會

評 議 員

監 事

総務部

部長

大浜 信泉

(早稲田大学総長)

茅 誠司

(東京大学総長)

小泉 信三

(日本学士院会員)

新村 出

(日本学士院会員 京都大学名誉教授)

高橋 竜太郎

(協和発酵工業株式会社取締役)

高村 象平

(慶応義塾大学総長)

平 沢 興

(京都大学総長)

俣野 健輔

(飯野海運株式会社社長)

部長

参事

河野 六郎

助手

参事

平野 豊

箕輪 友吉

助手

参事

奥島 久仁子

白川 邦子 高野 尚子

助手

参事

田口 幸子

竹内 サクノ 丸 亀 美貴子

助手

参事

三井 恵子

用人

参事

石井 浜吉

勝間 袈裟五郎 勝間 勇次郎

用人

参事

熊田 信次郎

染谷 コウ 長本 英雄

用人

参事

村越 晃

写真技師 児野 寿満子

写真助手 陸 富代

長本 一恵

製本技師 堀内 安雄

図書部

部長 岩井 大慧

司書 石黒 弥致

宇都木 章 田川 孝三

森岡 康 渡辺 兼庸

研究部

部長 榎 一雄

研究顧問 岩井 大慧

岩村 忍 (京都大学人文科学研究所教授)

梅原 末治

辻 直四郎 (日本学士院会員 東京大学名誉教授)

津田 左右吉 (昭和三十六年十二月四日死去)

原田 淑人 (日本学士院会員)

村田 治郎 (京都大学名誉教授)

山本 達郎

東洋学連絡
委員会委員

和田 清

岩井 大慧

梅原 末治

榎 一雄

金倉 円照

杉本 直治郎

塚本 善隆

辻 直四郎

津田 左右吉

仁井田 陞

原田 淑人

福井 康順

松本 信広

宮崎 市定

村田 治郎

山本 達郎

(東北大学名誉教授)

(広島大学名誉教授)

(国立京都博物館々長)

(東京大学東洋文化研究所教授)

(早稲田大学教授)

(慶応義塾大学教授)

(京都大学教授)

名誉研究員

和田 清

P・ドゥミエヴィル（コレージュ・ド・フランス教授）

S・エリセイエフ（ソルボンヌ大学教授前ハーヴァード・エンチン研究所所長）

W・フックス（ベルリン自由大学教授）

B・カルグレン（前スウェーデン王立極東古代博物館長）

E・O・ライシャウアー（ハーヴァード大学教授 駐日米国大使）

W・サイモン（英国学士院会員 ロンドン大学教授）

G・トゥッチ（ローマ大学教授 イタリア中東亞研究所長）

研究員

生田 滋

片桐 一男

北村 甫

高島 稔

永積 昭

松村 潤

研究員（兼任）

青山 定雄

（中央大学教授）

荒松 雄

（東京大学東洋文化研究所助教授）

市古宙三
(お茶の水女子大学教授)

岩生成一
(日本大学教授)

梅原末治
(京都大学名誉教授)

神田信夫
(明治大学教授)

河野六郎
(東京教育大学教授)

佐伯富
(京都大学教授)

末松保和
(学習院大学教授)

鈴木俊
(中央大学教授)

周藤吉之
(東京大学教授)

関野雄
(東京大学東洋文化研究所助教授)

田中正俊
(横浜市立大学助教授)

鳥海靖
(東京大学助手)

中嶋敏
(東京教育大学助教授)

藤枝晃
(京都大学人文科学研究所助教授)

松本信広
(慶応大学教授)

三根谷徹
(東京大学助教授)

護 雅 夫 (東京大学助教授)

山 根 幸 夫 (東京女子大学教授)

山 本 達 郎 (東京大学教授)

研 究 生 池 田 温 岡 田 英 弘

金 子 良 太 菊 池 英 夫

佐 々 木 正 哉 西 田 守 夫

山 口 瑞 鳳

助 手 岩 田 澄 江 大 沢 仁 子

大 場 千 賀 子 川 合 ナオエ

草 野 祐 子 国 岡 妙 子

杉 野 純 子 竹 之 内 信 子

秩 父 良 子 寺 山 祐 子

二 瓶 幸 子 広 瀬 洋 子

五 事 業

1 刊行図書

滿文老檔研究会訳註『滿文老檔』VI（太宗3） 東洋文庫叢刊第十二 昭和三十七年三月 B5判 三七〇頁 図版
三葉

滿文老檔は清朝初期すなわち太祖、太宗二朝にわたる三〇年間（一六〇七—一六三六）の編年体の記録であり、清初史料の中核をなすものであると同時に、滿洲語研究資料としても極めて重要なものである。本書は現在京都大学文学部に所蔵されている内藤湖南博士将来に係る奉天故宮崇謨閣蔵の有圈点滿文老檔（*Tongki fuka sindaha hergen i dangse*）の写真を底本として、これをメルレンドルフの翻字方式によつてローマ字に転写し逐語訳と意訳を附したものである。すでに太祖の部分三冊と太宗天聰の卷二冊を刊行し、本書にはそれにつゞく太宗崇徳の卷の卷一より卷二十五まで、すなわち天聰十年正月より崇徳元年八月までの部分を収めた。

『欽定西域同文志』中冊 東洋文庫叢刊第十六 昭和三十七年二月 A5判 七〇六頁

欽定西域同文志は清朝の高宗乾隆帝の準・回両部平定を記念して作製された「平安準噶爾方略」「皇輿西域圖志」及び準・回両部の新地圖の編纂と並行して纂修されたもので、十八世紀中葉における天山南北路・青海・チベット

の地理・歴史人名辞典とも称すべきものである。滿蒙藏準回の六体にて記され、清代の西域及びチベット研究に不可欠の宝典であるとともに、十八世紀中央アジアの言語資料として不滅の価値を有している。たゞ本書は流布が少く、稀覯書として利用が困難であつたので、今回東洋文庫所蔵の殿版によつて、その複製を刊行し、研究者の便を計つたものである。昨年度にその前半の一二巻を上冊として刊行したが、本年度の中冊には後半分の左記一二巻が収められている。

卷十四 青海属地名

卷十五 青海属山名

卷十六 青海属水名

卷十七 青海属人名

卷十八 西番地名(衛属・藏属・喀木属・阿里属)

卷十九 西番山名一(衛属・藏属)

卷二十 西番山名二(喀木属・阿里属)

卷二十一 西番水名一(衛属・藏属)

卷二十二 西番水名二(喀木属・阿里属)

卷二十三 西番人名一(喇嘛)

卷二十四 西番人名二(汗王公以下及官属)

八〇頁

Sadao Aoyama 青山定雄: Newly-Risen Bureaucrats of Fukien in the Five-Dynasty-Sung Period.

Hideyo Arisaka 有坂秀世: A critical Study on Karlgren's Tod Theory.

Sigeo KAWADA 鎌田重雄: Han Emperor's Policy of Oppressing Kingdoms.

Tojin KAYAMORO 榎本柱人: Han Tombs of Lo-lang—Their Studies by Japanese Scholars.

Yoemon YAMAZAKI 山崎与右衛門: Instrumental Multiplication and Division in China—from the Reckoning-blockes to the Abacus.

宋史提要編纂協力委員会編『宋代研究文献提要』昭和三十六年六月 A 5 判 八四二頁

一九五四年（昭和二十九年）の第七回 Junior Sinologues 会議において Sung Project（宋史提要編纂会本部パリ）が設けられ、国際的研究協力についての要請があつた。よつて我国においても翌一九五五年に宋史提要編纂協力委員会（本部東京、支部京都）が設けられ、内外の研究連絡を緊密にすると共に、まずはじめに日本人による宋代研究文献目録及び提要进行を編集することとなつた。そうして当時これが一動機となつて始まつた文部省科学研究費補助による宋代史総合研究班（宋代史の基礎的研究、代表者青山定雄）に委託し、その附帯事業として宋代研究文献目録の作成に着手し、一九五七年（昭和三十三年）に完成した。かくて、本委員会は一九五七年より東洋文庫

に附置されることとなり、同文庫の事業の一つとして文献目録を刊行する一方、宋代研究文献提要の編成に着手し、一九六〇年(昭和三十五年)に至つて完成した。本書は即ちそれを刊行したものである。当初宋代研究文献目録所収の一九五五年までのものの提要を作成するかたわら、それに漏れたものや一九五六・五七両年度のもの目録補篇も別に作成刊行すると共に、その提要を編成して収載した。このような大部な提要の編成はわが国ではじめてのことといつてよく、その方面の研究者にはもとより広く関心をもたれる人々にも多大の便益を供するものと信ずる。

近代日本研究室編『東洋文庫所蔵近代日本関係文献分類目録——和書・マイクロフィルム部——』第一分冊 昭和

三十六年十二月 B5判 一六四頁

一九六〇年四月、近代日本研究室が設置されて以来一年余を経過したが、その間、本研究室では発足に際して開国百年記念文化事業会から寄贈を受けた近代日本関係文献約六〇〇〇点について、整理・分類にあつて来た。そして、この機会に旧来から本文庫に所蔵されている近代日本関係文献、および、近代中国研究室で蒐集した近代日中関係文献をも併せて、その分類目録を作成することとなり、作業を進めて来て、このたびそのうちの和書・マイクロフィルム部が完成したので逐次出版の運びとなつたものである。

近代中国研究委員会編『東洋文庫新収中国新聞雑誌目録』(一九五八年一月〜一九六一年十一月) 昭和三十六年

十二月 B5判 三〇頁

一九五九年に同研究委員会より刊行された「中国文新聞雑誌総合目録」の続編で一九五八年一月より一九六一年十一月までに東洋文庫に新たに受入れられた中国文新聞雑誌を収録したものである。

『昭和三十五年度^{財団}法人東洋文庫年報』 昭和三十六年十二月 A5判 一四一頁

2 講演会

東洋学講座

春期

第四百四十回 昭和三十六年五月二十四日

「両税法成立の由来」

九州大学教授 日野 開三郎

第四百四十一回 昭和三十六年五月三十一日

「我が南西及び南方諸島の南蛮海図」

文学博士パリ大学D・Sc 中 村 拓

第四百四十二回 昭和三十六年六月七日

「中国貨幣史上の大銭」

東京教育大学助教授 中 嶋 敏

第四百四十三回 昭和三十六年六月十四日

「アジア史における仲継貿易の意義」

早稲田大学教授 松田寿男

第百四十四回 昭和三十六年六月二十一日

「日本研究の二人の先駆者、アンテルモ・セヴェリイニとカルロ・ペレンツィヤーニ」

国立ナポリ東洋大学学長 マルチエロ・ムツチョーリ

第百四十五回 昭和三十六年六月二十八日

「ハンガリー語の初期の文献」

東京外国語大学教授 徳永康元

秋期

第百四十六回 昭和三十六年十月十一日

「漢代豪族論」

名古屋大学教授 宇都宮清吉

第百四十七回 昭和三十六年十月十八日

「漢代の王国」

日本大学教授 鎌田重雄

第百四十八回 昭和三十六年十月二十五日

「漢の国家構造に関する一試論」

早稲田大学教授 栗原朋信

第百四十九回 昭和三十六年十一月一日

「漢末王莽時代における第二次農地の崩壊と農民叛乱」

東京教育大学助教授 木村正雄

第百五十回 昭和三十六年十一月八日

「漢代の租税形態」

第一百五十一回 昭和三十六年十一月十五日

「韻鏡の研究について」

立命館大学教授

平中 荅次

東京大学助教授

三根谷 徹

講演要旨

両税法成立の由来

九州大学教授

日野 開三郎

夏税秋税より成る両税法は徳宗の建中元年に宰相の楊炎が創めたものとせられているが、夏税・秋税の名は既に代宗の大暦元年から詔勅中に見えており、その地域は京師を中心とする関輔の範囲に限られ、且つ減税に関するもののみである。建中以後の両税は戸税とも呼ばれ、又農村の両税は地税とも呼ばれていた。両税法は戸を課税の対象とし、農民に対しては田畝割に税を課徴していたからである。所が大暦の夏秋税も戸税・地税等とも呼ばれ、又大暦五年以後の夏秋税の田畝割税額は建中・貞元頃の税額と略々同じであつて、楊炎の両税法が大暦の夏秋税を承けつぎ、これを整備したものであることが知られる。つまり大暦の夏秋税は楊炎の両税法の源流をなすものであるが、これほど重要な夏秋税の制定に関する詔勅が全く伝えられておらず、創税の経緯や年月等一切判らない。

翻つて安祿山の乱が勃発した後ちの税法を見るに、従来の正税たる租庸調戸税・地税（両税の別名としての戸税・地税と異なる）等の外に新に青苗銭が起徴せられており、その他にも戦費調達のための臨時徴収が頻繁多額に配賦されてい

た。加うるに内地に列置せられた藩鎮の恣意的な徴収も甚しく、地方行政の中心機関たる州の長官には一年に二百回以上もの追徴が嚴達せられていた。そこで州の長官は夏秋の收穫期、即ち民戸が収入をあげる時期に予めその年内に徴収せられるであろうと推測せられる額を纏めて徴収しておき、上からの追徴が来る毎にその額を供出する方法をとっていた。即ち租庸調・戸税・地税その他一切の課徴は一括して夏秋の收穫期に予め徴収せられていたのであつて、その配徴方法を見るに農村に於いては田畝割の制を採つていた。此れが夏税・秋税と呼ばれるものの起りで、いわば一切の課徴を末端機関の州県で総括徴収したのが夏税・秋税の起りであつたのである。時に戦乱の爲め漕運が絶え、関中の欠乏は甚しかつたので、関中の課徴は特に重かつたが、劉晏の努力で大暦元年頃から漕運が再開せられ、関中の減税が可能となつた。そこで租庸調や戸税・地税その他の課徴の軽減を命じたが、藩鎮の跋扈等の事情で末端での實際徴収は些かも減らなかつた。よつて中央政府は末端での實際徴収額に枠を被せて国民負担の軽減を实效あらしめんとし、よつて末端州県の実徴方法として生れていた夏税・秋税を正式に採り上げ、その減額を命じたのである。夏税・秋税が制定の詔勅なくして登場し、且つ関中の税額減少の詔勅中に最初にその名を現しているのは、右の様な事情による。尚此の様な田畝割総括徴収に関する安史の乱以後の初見史料は至徳二年に遡ることが出来る。

我が南西及び南方諸島の南蛮海図

文学博士
パリ大学 D・Sc
中 村 拓

葡萄牙・西班牙による世界発見、更に両国による香料群島の争奪、次で西欧近代国家群の東方進出という世界史を背景として演ぜられた琉球・小笠原の歴史即ち今日邦人の深い関心を懐く地域の問題を地図を中心にスライドにより

回顧しよう。十六世紀半ばに南蛮人の作った地図中の日本の図形には (一) Mercator (二) Homem (三) Ortelius (四) Douardo の四型があり、(一)は中国で得た伝聞に基き推測で描いた地図であり、(三)は(二)の一変種に過ぎないから原著の意味をもつのは(二)と(四)で、而も(二)は僅か三十年の短命で終り、独り(四)のみが一世紀以上の寿命を保った。従つて鎖国前来朝した南蛮・紅毛の舟人達は悉く Douardo 型の海図を使用した。幾人もの古地図学者が南蛮海面上における南西諸島の同定を熱心に追究したが日本の資料を無視した為充分な成果は収め得なかつた。同定し得た結果によると南蛮海図の特徴は緯度の正確さに現われている。これは天体観測によつて航海するのに使う海図としては当然のことである。西班牙の第四次遠征艦隊に属する Bernardo de la Torre は比律賓からメキシコに帰ろうとして北東に航行一五四三年九月二十五日我沖ノ大東島を発見し、更に南・北大東島、小笠原の母島を徑て伊豆諸島南端孀婦島の東方まで進んだが続航の望みなく空しく北島に引返した。南蛮人の種子島漂着が一五四二年か三年か史家により種々論ぜられた所である。発見の月日をも伝うる南浦文之の記事が拠るべきだとするならば沖ノ大東島の発見は種子島漂着の二日後に当ることになる。比島からメキシコへの逆航は比島の植民政策の成否に係る大事であるから度重なる失敗にも屈せず執拗に捜し求め一五六五年に Urdaneta はマリアナから日本の東岸に沿うて北上し遂に北西風を発見し比・墨間の航海は可能になり、比島の経営は確立した。西班牙人は比・墨航路や海図が外に洩れることを極度に警戒し厳秘にしていたが、澳国王位相統戦中提督 Ansen はメキシコから来た西班牙船を一七四三年 S. Bernardino 海峡の入口に邀撃拿捕し莫大な戦利品を得たが、それにも優つた収穫は Urdaneta 以来秘密にされていた太平洋航海図の入手であつた。この図は間もなく彼の世界周航記中に公刊せられ、西班牙の秘密政策は崩壊し去つた。この頃に

は東亜における西・葡の勢力も漸次衰え、新進国家群が競つて太平洋に進出し西班牙海図上の夥しい島々の探検に乗出したが位置の混乱甚しく同定は不可能であつた。然し古地図の研究はこの混乱の原因を解明した。即ち比・墨航路附近に長い間に随時発見せられた島々は経度決定の困難から誤つたり重複して記載せられ、他方近代の探検家・航海家は古地図学者ではないから、西班牙海図を充分理解することができなかつた所に混乱の原因があつたのである。

中国貨幣史上の大銭

東京教育大学助教授 中 嶋 敏

基準貨幣としての銭（小銭）の整数倍の額面值を賦与した銭を大銭という。大小銭を併用して物価操作を行なう貨幣制度は、戦国時代にすでに現われた。円肩円股方足布や三孔円足布にその徴証が見られる。（周の景王や楚の荘王が大銭を鑄たという所伝は史実とは言えない）。大小銭併用の貨幣理論がいわゆる子母相権説で、国語の周景王の条に見えるところである。この理論を現実の制度化したのが、王莽の貨幣制度であつた。大銭の鑄造行使は、その後、三国時代の呉・蜀や唐（乾封泉宝・乾元重宝等）にも見られるが、宋に至つて、四川の当十鉄銭、陝西の慶曆当十銭があり、熙寧年間から折二銭の全国施行となり、蔡京の大銭政策となつて現われ、宋の貨幣制度の重要な一環を成している。以後、制度としては、元・明にも時に大銭が発行されたが、重要性に乏しい。清代には咸豐大銭が顕著なものである。

大銭の施行は主として財政的見地に立脚している。比較的少量の銅材料で高額の銭を鑄造行使することによつて、政府はその財政を助けたのである。次に経済界の需要する貨幣数量に対応する意味が考えられる。商業が発達し、商

取引が旺盛となり、貨幣の需要も増大する。限られた銅材料をもつてなるべく大量の貨幣を鑄造して、この需要を出来るだけ満たそうとして大錢が鑄造されるのである。第三に額面の大きなことが経済界に利便とされた点が考えられる。發達した経済界では、一文銅錢の如き低賤の価値をもつ貨幣では満足できなくなり、当二・当十の如き大錢をむしろ授受取扱に便なりとする（特に宋代四川の鉄錢の場合に著しい）。宋の折二錢の如きは、そのために比較的安定した流通を示したと考えられる。

このように大錢發行の理由はいくつか考えられるが、多くの場合、財政的補助の見地が優先している。そのために素材価値と名目価値との均衡を失し、額面通りの流通を困難にさせ、一面には偽造の弊害を助長し、貨幣制度の紊亂を招来することがむしろ常態で、安定した大錢制度はまれであつた。高価値の貨幣に対する経済界の要求は、結局銀によつて充足された。明・清に至つて、銀が主貨幣としての地位を確保することとなるのである。

アジア史における仲継貿易の意義

早稲田大学教授 松田寿男

アジアは、ヨーロッパなどとは比較にもならないほど広大な大陸である。そのうえ自然的条件においても人文的条件においても、実に複雑であり、多様であつて、もちろんヨーロッパと同様に考えることはできない。そのためにアジア大陸は、孤立性の強い、そしてそれぞれに様相を異にする多数の小地区の集合体となつてゐる。すなわち、地理的多元性こそ、アジアのもつ最大の特長でなければならぬ。それならば、このような地理的な運命を歴史によつて打破した点にこそ、アジア史の比類ない特色が求められるであらう。異質でしかも封鎖性の強い小地区間の交渉

は、その契機であつた。それは、戦争・掠奪・交易などの形をもつて歴史にあらわれたが、とくに有無相通ずる交易は注目されるべきである。それによつてAとBとの間に交渉がはじまると、やがて次の段階として、AがCの特産をBに取次ぎ、BがDのものをAに運ぶ形があらわれ、A B C Dが一連の交渉線を描き、一線の上にならぶ。このような商品中継がさかになると、アジアという广大で複雑多様な「モザイク」の上には、網のように商路がはりめぐらされる。それらはとくに奢侈品の中継によつて支えられ諸地方に市場を榮えさせてゆく。孤立性の強いアジアの各地方は、このようにして綜合されて、一個の歴史的对象を形成しえたのであり、したがつて仲継貿易こそはアジア史成立の重要な原理でなければならない。また「東西交渉」すなわち東西アジアの握手、ないしアジアとヨーロッパとの連絡も、そう考えることによつてはじめて意義を見出すことができる。

アジア大陸の各部分を連絡した交渉線のうち、とくに東西交渉という見地から重視されるのは、次の三線である。

① *Steppe route* すなわち北アジアの遊牧生活者のあいだを東西に走つていた商路、② *Oasis route* すなわち中央アジアのオアシス地帯を媒介として中国とインド、あるいはイランを連結していた商路、③ *Sea route* すなわち東南アジアの海洋生活者の活動によつて、中国とインドとが海上で結ばれ、さらにそれが西方の紅海やペルシヤ湾の航路と結ばれて一本の商路となつていたもの。この三ルートは、中国の絹を西方にリレーしたという点からすれば、どれも等しく *Silk-road* (絹の道、*Seidenstraßen*) と呼ばれてよく、現在一部の学者が第二の *Oasis route* にのみこの呼称を用いているのは、認識不足といわねばならない。しかし、それよりもつと重要なことは、この三 *route* における絹の転送が明かにしているように、東西交渉を發達させ、それを維持したのは、仲継貿易だつた点にある。仲

継貿易を考慮しなかつたならば、東西交渉はほとんど成立しえないのである。しかもこの場合に、自給自足性の強い中国自体よりも、それをとりまく異質な生活者の活動が基本となつてゐることは、充分に注意されねばならない。東南アジアの沿海部や島嶼に見られたささやかな海洋生活者は、その天産や奴隸の貿易で早くから商業的にめざめていた。また中央アジアの砂漠地帯に *Oasis* を基本として展開された生活は、局限された耕地と乏しい資源の故に、他地方との交渉を必然的に運命づけられていた。さらに北方のステップに活動した遊牧民は、いかに広大な土地に住んでいたとはいえ、その生産が単一であつたが故に、他の生産地域との交渉なしにはとうてい発展は望めなかつたのである。なおステップ遊牧民の北方のシベリア森林地帯に住んでいた狩猟民ですら、けつして原始的生活者ではなかつた。彼らの生活を支えていた毛皮獣狩猟は、それ自体が交易を前提とするではないか。彼らが狩猟した貴重な毛皮は、早くから中国に送りこまれ、あるいはヨーロッパにリレーされているから、東西交渉は意外にも広大なスケールをもつものであつた。このようにして、従来の史家によつてほとんど無視され、低く評価されるにすぎなかつたアジアのいろいろな生活者が、それぞれの生活上の欠陥を補うための必然的な欲求から発達させた仲継貿易によつて、東西交渉ははじめて成立し、アジア史はその構成の原理を見出すことができたのである。

日本研究の二人の先駆者 アンテルモ・セヴェリーニ (*Antelmo Severini*) と

カルロ・ヴァレンツィヤーニ (*Carlo Valenziani*)

国立ナポリ
東洋大学学長

マルチエロ・ムッチョーリ

ヨーロッパに於て最初に日本に就て物語り、この国の存在を初めてヨーロッパ人に知らせたのは一イタリア人、即

ちベニスのマルコポーロであります。彼はその有名な著書「*Il Milione*」即ち「東方見聞録」の中で、中国に於ける彼自身の体験や、そこで見聞した事柄及びその当時、中国に到達する為に通過しなければならなかつた国々、所謂「*Silk Road*」の沿道に散在していた国々に就て物語っているのですが、その他の地方についても、彼が實際訪問する機会を得た所ばかりでなく、ただ伝聞に依るものまでも記録しております。其の中に「*Cipang*」即ち日本に関する一章が設けられてありますが、マルコポーロは一度も日本には足を踏み入れた事がなかつたのでありますから、それは彼が中国滞在中に交渉を持った、中国人からの、又聞きに依るものであることは、明らかであります。日本に関する物語りが、空想的で、極めて珍奇であるのも、その為であります。当時のヨーロッパ人は、彼の物語る所の、金銀真珠等の財宝に満ちた、日本の話しに、只々驚歎の外はなかつたであらうことは、想像に難くありません。況や、金の豊富なことは驚くばかりで、広大な皇居の屋根は全部金の瓦で被われている、と書かれているにおいであります。この巨万の富の宝庫としての日本の話しは、ヨーロッパ人の間に代々言い伝えられまして、全世紀に亘つて、地理学者や文筆家の好奇心をそそることにあります。如が *M. Von Brandt* も指摘している様に、コロンブスの時代になつて、彼がこの「*チパング*」の巨大な富を夢見ながら、航海を続けていた時、即ち一五〇〇年には、実際の日本に於ては、後土御門天皇が貧窮の中に崩御せられ、葬儀の費用にもこと欠き、その亡骸は四十九日間も京都の皇居の門前に置かれたままであり、それを、当時の一豪族佐々木高頼が畏れ多い事だと、費用を献じたので、やつと埋葬し奉つたと云う様な有様であつたのであります。

ともあれ、十三世紀に於て、日本の存在を初めてヨーロッパに紹介したのはイタリヤ人の功績と云わなければな

りまん。

然し、ヨーロッパ人が、正確な日本の事情を知ることが出来たのは十六世紀も半ばに入つてからのことで、この時代になつて、初めてヨーロッパ人は日本を発見し、直ちに、国際貿易と、キリスト教の布教圏内に入り、先ずポルトガル人、続いてスペイン人、オランダ人との間に活潑な交渉が始まることは皆様もよく御存じのことです。

その当時の日本に関する知識は、来日した宣教師達の手になつたもので、報告書又は、書翰の形で、各々の所属する宗派の、公文書保管室に保存されていた訳であります。徳川幕府の鎖国後、即ち一六〇〇年に、それ等の記録を利用して日本の事情を総体的に把握し、正確な、そして優れた一つの文献にまとめて世に発表したのも亦、一イタリア神父 *Daniello Bartoli* であります。

思えば、何と云う不思議なイタリアの運命でありましょう。他の歐洲諸国に先立つて、夢想のかなたに在つた極東の神秘の扉を開いたのは実に勇敢な、又有能なイタリアの市民であつたのですから。この様な輝かしい記録や著作の歴史を有するイタリアでありますから極東研究は当然そのお家芸となつて尊敬に値する根強い伝統を作り上げた筈であります。処が實際は、そうではなかつたのであります。其の理由は当時のイタリアの荒廢した政治情勢に求めなければなりません。御承知の通りイタリアは長期間に亘つて、一部は外国の支配下にあり、他の地方も幾多の小独立国に分割されており、しかも各々が過去の文化の惰性に依つて、安眠を続けていたのでありますから、ヨーロッパ圏外に新領土を求めようと云う様な野心を抱くには、余りにも無力であつたのであります。従つて他のヨーロッパ強国が国外に大植民地を獲得しつゝあつた時、個人的にはコロンブスを初め、多くのイタリア人がその決定的役割を演じて

いたとは云え、国としては、何のなす処もなく、無関心に手をこまぬいていたのであります。然し、その無関心が後になつて却つてイタリアをして、計り知るべからざる有利な情態に導いたのであります。即ちイタリアは、アジアに於ても、また他の地方に於ても、貧慾且低級な商業主義に基いた植民政策が当然もたらしべき、土着民の恨みを買うような事がなかつたばかりでなく、イタリアから派遣された特種技術者の努力に成る立派な仕事に依つて、彼等の心の中に好印象を残すことが出来たのであります。それは嘗て、イタリアの技術家や芸術家が泰や印度、日本に於て成し遂げたことに記憶を辿る時、明かでありまして、日本に就てだけ言ひましても、前世紀に於て、日本が封建制度の殻を破つて、近代国家として目覚しい発展の道を歩み始めた時、その協力者として活動したイタリア人の名を挙げますと、彫刻家 Vincenzo Ragusa 建築家 Vincenzo Cappellotti 洋画の Antonio Fontanesi 彫物に於ける Edoardo Chiossone 等があります。彼等は皆この日本に於て、それぞれ有能で熱心な弟子や讚美者を多く持つことが出来ましたので、その人達に依つても、又、イタリアの名が一層深く皆様の中に印象されることになつた訳であります。

御承知の如くイタリアが統一国として列国の仲間入りをしたのは、僅か九十年前のことでありました。その為、他のヨーロッパ諸国が、植民地行政上必要欠くべからざるものとして、大いに力を入れた極東研究と云うものに対しての刺激がなかつたのでありまして、殊に日本研究に対しての関心は、イタリアでは非常に遅れることになりました。その代り、イタリアに於けるアジア文化及び言語の研究は、物質的利害を超越したものと成り、古い文化と歴史の国、インド、中国、日本等の神秘的な世界の美術、詩歌、思想等に魅惑せられたが為にこそ、なされたのであります。それ故、イタリアの東洋語研究は当然、美の探究と云う目的に向つてなされることになります。

イタリアに於て、政府の機構内でなされた、東洋研究は、前世紀の半ば頃より始まりまして、日本研究の畑に於きましては、その先駆者として二人の碩学の名を挙げる事が出来ます。即ち *Antelmo Severini* と *Carlo Valenziani* でありますが、今日はこの二人に就て少しくお話しし度いと思ひます。

アンテルモ・セヴェリーニは、イタリアで初めて大学の日本語講座を担当した教授でありまして、一八二七年六月二日 *Macerata* の近く *Arcevia* と云う小さな町に生れました。マチェラータは、マルケ州にある都市であります。この「マルケ州」と云うのがイタリアの錚々たる東洋学者を産み出した地方でありまして、彼の有名な、十六世紀の宣教師 *Matteo Ricci* や、最近東京の伊太利文化会館の開館式に來日したので皆様もよく御存じと思いますが、*Giuseppe Tucci* も亦このマルケ州の出身であります。

さて、セヴェリーニの幼い時、町医者である父が一家を挙げて、マチェラータ市に移住しましたので、セヴェリーニもマチェラータで小中学校を卒業更に古典研究に進み、生来言語学に対する天稟に恵まれ、又芸術作品に対する鋭い感覚にも恵まれていた彼は、この方面に於ける第一流の薰陶を受けることになりました。そして二十才の若さで、彼の通学していたマチェラータ大学で、成績抜群の理由に依り、全教授団の拍手の裡に、特に名誉法学博士の学位を授与されました。そして一年後には同大学に迎へられて、統計学と歴史を教え、後、マチェラータ市営図書館員となり、一八五八年迄勤務、同年彼は文学の講義を聴講する為、フイレンツェに赴きました。そして二ヶ年後にはトリノ市で行われた東洋語学研究生のコンクールに応募しまして奨学金を獲得、イタリア政府派遣留學生として、巴里に留學します。巴里では當時有名な中国學者 (*Sinologue*) *Stanislas Julien* に就て中国語を學ぶと共に、これまた有名

な日本学者 Léon de Rosny のもとで、日本語を研究します。

パリ滞在中、彼の東洋研究熱は堰を切つた奔流の如く、飽くことを知らぬ努力の結果、彼の長足の進歩の前に、教授達も只感歎の外はなく、あらゆる予想を遙かに凌ぐものであつたと云われております。それを裏書きするものとして、Julien は彼について次の様な評価を発表しております。

「私は三十二年間中国語を教えているが、今までの弟子の中（賞讃に値する翻訳を発表しているものも多いが）、只一人として彼程の努力を示し、又彼程輝かしい進歩を示した者はいない」と。

この証言に対して、Mohl, Gauthier, Renan, Reinach と云う様な当時の有名な東洋学者並に彼が五ヶ月間日本語を学んだ Leon Pagés 等も一致して同意を示しております。

この様な讃辞と輝かしい成績にも拘らず彼は少しも高ぶることなく帰国後も、それは彼の生れながらの性格でありましたが、真の学者にふさわしい謙遜な態度をもち続け、東洋の文化と語学を普及させる為に全力を尽そうと心に誓つたのであります。そして、この彼が一生を捧げようとしている東洋研究に対して、イタリアの学徒間にも出来るだけ深い関心を引き起すことに努力するのが自分の使命であると思ひ、この高い理想が次第に彼の心の中で其の形を明かにして来るのであります。

彼がパリから帰国した頃のイタリアの文部大臣は、これ又アラビヤ学者として当時有名な Michele Amari でありましたが、セヴェリーニが将来、イタリアの東洋学界に於て、如何に重要な役目を演ずべき人物であるかを、直ちに察知しまして、新興イタリアの首府であつたフィレンツェの大学即ち Istituto di Studi Superiori の課目の中

に、わざわざセヴェリーニの為に、イタリア最初の東洋学の講座を設けたのであります。このフィレンツェの大学でセヴェリーニは日夜勞れを忘れて、仕事に没頭し、彼の門下から、中国語専攻の Carlo Piumi, Ludovico Nocentini 等の優秀な弟子が輩出しております。Bollettino Italiano degli Studi Orientali 即ち東洋研究学報はセヴェリーニが一八七六年に創刊したものでありまして、その同じ年、彼はピエトロブルグで開かれた国際東洋学者会議にイタリア代表として参加しております。前に申し上げましたフィレンツェの Istituto di Studi Superiori と云うのは、現在のフィレンツェ大学の前身である訳であります。そこに漢字と仮名文字の活字を設備しまして、中国語、日本語の原文の印刷を他国に頼らずに出来るようにもしております。

セヴェリーニの長い学者生活は主に日本の文学及び語学をイタリアに紹介普及することに捧げられたのであります。が、その側ら、彼の研究は、ヨーロッパ諸国の言語は勿論、東洋では日本語、中国語の外、満洲語、トルコ語、チベット語、シャム語に迄も及んでおります。

彼の多数の著述の中、日本に関する主なるものに「竹取物語」のイタリア語訳、柳亭種彦の「浮世形六枚屏風」の翻譯。これは「*Uomini e paraventi*」(人と屏風)と云う題で、最初にイタリアで紹介されたものであります。もう一興味あるものは「*Le Curiosità di Yokohama*」と云う、原本「横浜奇談」の翻譯で、明治七年(一八七四年)出版されたもので作者は菊苑老人とあります。これは恐らく当時の名ある文筆家のペンネームでありましょうが、私はまだ残念ながらこの作者の本名を知ることが出来ません。

横浜は安政六年(一八五九年)、地理的に余りに江戸に近い神奈川に、とつて代つて外国人の居留地となつたので

ありますが、この「横浜奇談」が出版された一八七四年には、既に将来の大発展が約束されており、欧米の商人達の事務所や倉庫も数多あり、市中は、これ等外国人の往来で特殊な賑わいを呈していたのであります。一般に西洋人は、今日の様に名所見物の為に旅行に出ることなく、仕方のない場合以外は殆ど横浜市の外へ出なかつたのであります。それは攘夷論なるものが跡を絶たず、西洋人が殺害されることも少なくなつたからであります。それにも拘らず、日本全国に亘つて西洋の事、西洋人の習慣、日常生活、日用品等なんでも知り度いと云う好奇心が強く沸き上つていたのであります。「横浜奇談」と云う小冊子は、云わば当時の大衆の好奇心を満足させる為に書かれ、そして出版されたものであります。これは、文学的価値の点からは取るに足らぬものであるとは云え、当時の世相を反映した一つの歴史的文献とも言い得るもので、今日に於てこそ一笑に値するとしても、当時に於ては大衆の要求にマッチしたもので、多くの日本人に貪り読まれたに違いないと思つてあります。もつと後になつて、實際、西洋諸国を視察した日本人達によつて多くの啓蒙書が書かれましたが、この「横浜奇談」は、その当時横浜に住んでいた一人の日本人の目に映つた所の西洋人の日常生活を細かに記録した、最初の印象記とも云うべきものであります。

この小冊子に何が書かれてあるかは、恐らく皆様も御存じないだらうと思つますから、当時の外人町の様子を書いてある所を一部、御紹介致し度いと思つます。

「楮亦彼国の婦人も、あまた渡來いたし居けるが、いづれも細面にて疲形なる美婦人なり。耳へは金銀瑠璃珊瑚など種々にかざり、冠ものをはじめ、そのよそほひはなはだ美麗にて、あたかも天女の天降りしにやと疑る。彼に羽衣を着さしめて、三保の松原に詠めたき風情なり。また馬に乗る事、男子にもおとるまじく見ゆ。されども彼の国の風

なる歎嫉妬なげかしつとのふかき事我國わがくにの婦人ふじんに十倍じゅうばいせり。さる故ゆへに密夫まいたとこをするなどといふ事は、怪我けがにもなきよし。貞操ていそうを厚く
まもるにやあらん夫婦ふうふの中なか、至いたつて睦むつしきさま表おもてにあらはして更に隠かくす事なし。道みちを行ゆくにも手てをひきあふてあゆめる
は鴛鴦うんおうのつがひの如ごとし。実直じつちよく厚あつき躰ていも見ゆ。いはゆる隠かくれたるよりあらはるゝはなしの意いにかよひて、おもしろし。
又また異人いじんの小児せうじ出産しゆつさんの節ときは、更に湯水ゆみづを遣ゆはせず。産毛うぶげをも削そる事なし。只幾度ただいくたも拭ふとり拭ふとりて、取揚とりあるなり。其まの
ち母ははの乳ちゅうは吞のせず牛うしの生乳ちゅうにて養育そだつる事彼國かのくにの風俗ふうぶくなりとぞ。それより三四歳さんしうさいにおよべば、常つねの遊あそびに、大なる樹きの
枝えだへ、細綱ほそなを結びさげ、その真中まんなかへ尻しりを居す、両手りやうてにて左右さうじゆうの綱つなを掴つかませ、うしろより、これを突つすれば、その突つきたる
勢いきほひにて、三間さんけんも五間ごけんも前まえのかたへ、とび上あり、又また戻もどるはづみに後のちのかたへ飛とびあがるなり。右みぎのたくひを毎日まいにちの遊
戯あそびとせり。側そばに見みるものすら、目のまはるほどなり。これは大洋たいやうを乗船じやうせんするとき船ふねに酔よがるためにすと也。此頃このころより
して、馬うまにも乗のせ、連つれあるく故ゆへに、馬うまに乗のる事は自然しぜんに得うるならん。総すべて究理きうりする風土ふうどなれば、無益むえきの事は好まぬ
とかや。こゝに、おかしきは、異人いじんの妾めかけとなりし女ををさして、らしやめんと唱となるなり。此名このなを負おし元もとといふは、異人いじん
彼國かのくにより連つれたりし、らしやめんといふ獸けものあり、其性せい素直すなはにして、よく人に馴なれしむものなり。船中せんちゆうにてまどろす
ども(下官下部をいふ)煩悩ぼんなんきざしたるとき、此獸このけものをとらへて、おかす事ありとぞ。此故このゆへに異人いじんに犯おかざるの義ぎより
して、らしやめんといひならはせしも理ことわりなり。諺ことわざにいふ、狐きつねにこんかい馬うまに止動とどうの誤あやりにも似によりて、今いまに至いたりては、
改あらためがたきも、いとおかし。また彼國かのくにより犬いぬをも連つれわたりて、飼付かひつけおくなり。其犬そのいぬによりては餌あたかドル三拾枚さんじゅうまいまたは、
五十枚ごじゅうまいも出して買取かひこるとぞ。この犬いぬ、我國わがくにの犬いぬとちがひ、始終しじゆうその飼主かひぬしにつきしたがひて、何所どこまでも行ゆくなり。その
主途ぬしちゆう中ちゆうにて求めたる品しなもの、風乾ふうかんしき包つみなどを啞くわへて附つあるく。此故このゆへに飼主かひぬしの愛あいする事、はなはだし。万まん一途いちちゆう中ちゆうなど

にて、はぐれたるときは、子をうしなひたる親のごとく、草木をわけて、尋出さんとおもふ顔色、只ならず見ゆ。毎
日食事などの節も、我側に引付け置き、わが喰さしの品を引わけて与ふるさま、親子兄弟のごとし。つねづね身奇麗に
するにも、似合ざる事なり。且当地の人など、異国の犬をば、カメといふ事と心得、異犬を見ては、カメ〜と、よ
ぶものあれども、左にはあらず。彼方にて、都て目下ものを呼まねくの英語にて、犬の総名にはあらずとぞ。扱ま
た、南京人は、西洋人の奉公人にて、あまた渡来し居るなれども、元彼国は、聖人出現の地端なる故、定めて風雅風
韻もあらんと思ひしに、却て西洋人よりも、さがしきのみにて、更に好ましき所なし。又黒人と唱ふる異人も多く渡
来してあり。これはアラビヤ国の出産にて、男女ともに、色酷だ黒し。たとへていはゞ、鳥のごとく、爪先までも黒
し。生得愚昧にて、その所爲禽獸にちかし。その以前は、西洋人彼をして牛馬同様に取扱ひ、売買にいたし、めしつ
かひたる処、そのうちに少しかしきもの出きたりて、大いに立腹なし、我々とても同じく天地間の人なり、しかる
を牛馬のごとく売買にする事あらんや。給銀にて取りはめたらんには、雇はるべし、と申すに付、それよりのち、当
時にいたりては、皆通例の奉公振になりしとなり。」

「横浜奇談」については、これ位に致しまして、セヴェリーニの他の仕事に、一言触れ度いと思ひます。それは重
に、日本の歴史、和歌等に関するものでありますが、前にも申し上げました様に、その傍ら、中国語に関する研究にも
熱心でありまして、彼の遺稿の中に“Clavis sinica”(漢字の鍵)と云う、イタリヤ語の漢字大辞典が未出版のま
ま残っております。彼はこの辞典に、よ程心残りがあつたと見えて、臨終に際して、この辞典を是非出版してもら
うに、政府に運動する様に、と子供達に遺言しております。もう一つ未出版のものに、尨大な「英漢辞典」がありま

すが、これは彼が二十年の歳月を費やしたもので、その原稿のカードは、大きな戸棚一杯につまつております。

東洋研究の先駆者であると同時にその熱心な保護者でもあつたセヴェリーニは、世の讃辞とか、名声にはおよそ無関心でありまして、停年に達し、大学の教壇を去つてからは、当時の *Pausula* 今の *Corridonia* と云うマチェラータ附近の一閑村に身を引き、一九〇九年四月六日八十二才をもつて、この世を去りました。

前に申上げました様に、極東の言語及び文化研究の畑に於きましては、イタリア統一後最初に大学の講座を担当したのが、セヴェリーニでありましたが、次はローマ大学に於ける *Carlo Valenziani* であります。彼は、一八三一年五月五日ローマに生れ、長じて古典研究に進み、一八四七年高等専門学校の哲学科を卒業、後ローマ大学で法律を専攻中、独立戦争に義勇兵として参加しまして、数ヶ月は戦場でおくりませんが、無事ローマへ帰省することが出来まして、一八五〇年、同大学の法科を卒業しました。彼の真面目な生活態度と深い専門智識は、早くも人々の認める所となりまして、鉄道行政の要職、ローマ貯金局顧問、そして一八八〇年から八六年迄はローマ市行政委員等に任ぜられております。かくも多忙な公職にあり乍ら、一方、彼は、自分の心から愛する語学の研究を進めていたのであります。其の範囲は広くヨーロッパ諸国の古典と現代語に及び、殊にフランス語に於ては専門的な深い造詣を示しております。彼が日本語と中国語に手を染めたのは、一八六四年、三十三才の時でありましたが、やがて彼は此の分野に於けるイタリアの巨匠となる訳であります。一八七六年彼は、時の文部大臣 *Coppino* の招聘を受け、ローマ大学で極東語及び極東文学の講義を担当することになり、一八九六年十一月二十七日、彼の死に至る迄、ここでの教授生活は続けられるのであります。其の間、一八七九年には、同大学の *professore straordinario* (定員外教授) 一八九一

年には *professore ordinario* (正教授) に任命されております。

彼は氣品に満ちた、そして洗練された文章家であると同時に、又熱心な蔵書家でもありまして、自費を投じて、中国や日本の書籍を丹念に蒐集しておりましたが、現在の、ローマ市の国立図書館 *Vittorio Emanuele* は、その彼の蔵書に依つて一層豊かなものとなつております。

彼は又、一八七五年より既に、イタリアで最も古い、そして学界の最高峯を代表する *Accademia dei Lincei* の学士院のメンバーでありまして、日本政府からも、その尊敬すべき業績の故に、特に叙勲されております。

「竹取物語」や「浮世形六枚屏風」の様な物語り文学を最初にイタリアに紹介したセヴェリーニの後に続いたヴァレンツィヤーニは、それまで誰も手を着けず、全く未知の世界であつた所の日本の演劇を、イタリアの知識階級に紹介する為の特に力を入れております。その翻譯の中に、狂言が二つ、即ち「長光」と「薩摩守」があり、浄瑠璃では「一谷嫩軍記」いちのたにのたはほんき 五段の中三段目の「須磨の浦の場」があります。この「一谷嫩軍記」は専門家の研究に依りますと、並木宗輔(一六九五—一七五一)が書き始め、弟子の浅田一鳥、浪岡鯨児、並木正三(一七三〇—一七三三)、難波三蔵、豊竹甚六によつて完結されたもので、宝暦元年十二月一日(一七五二年一月十六日)大阪の豊竹座で初演されたものであります。同じく、浄瑠璃で「お染久松」の二段と三段、即ち「道行夢路の地蔵めぐり」と「質店の段」の全訳があります。この出版に当りまして、ヴァレンツィヤーニは、わざ／＼ことわり書きをして、これは、近松半二作の「お染久松新版歌祭文」から取つたものでこの作は版を重ねるに際して「染模様妹背門松」とも改題されているものであると云つておりますが、これは明らかに彼の間違いであります。同じ材題を取扱つていても、「新版歌祭文」は

近松半二の作でありますが、「妹背の門松」の方は菅專助（一七二八—一七九）の作でありまして、しかも、ヴァレンツィヤニーは菅專助作の原本を使つているからであります。この浄瑠璃が、明和四年十二月十五日（一七六八年一月三日）大阪の北堀江座に於て初演されたことは記録に明らかな所であります。

それでは、あれ程注意深いヴァレンツィヤニーが、何故こんな間違いをしたか。その説明は至極簡単であります。それは、彼の手元に必要な文献や資料が不足していたからだとの一言に尽きます。その翻譯も亦、彼自身が認めていた様に、ここかしこ、欠陥があることとありますが、私はまだ、この浄瑠璃の原本を手に入れることが出来ませんので、それを批評する立場にはありません。

ヴァレンツィヤニーは其の他、貝原吉吉（よしひさ）、別名恥軒（一六六四—一七〇〇）作の少冊「ことわざ草」を註釈出版しておりますが、この原本も、あまり日本では知られていないものと思われれます。

も一つ重要な仕事として、彼は滝沢馬琴の伝記を著しております。これは詳細なものではないとは云え、ヨーロッパに於ける初めての試みでありまして、その為には多くの文献に目を通したらしく、主に、彼の有名な「里見八犬伝」の末尾に載つてゐる馬琴自身が書いた自伝に依るものではありますが、そこには非常な苦心の跡が窺われるのであります。

各分野に亘つての研究が非常な進歩を遂げた今日から、以上申し上げた二人の東洋学者の仕事を顧る時、正直な所、それは質量共に、大なる業績であつたと云われぬものであります。然し、彼等の生きていた時代に辛うじて手に入れることが出来た、僅かばかりの文献や不完全な参考書のことを思う時、我々は、彼等の大なる努力と苦心の

跡を、更めて高く評価せざるを得ないのであります。当時のヨーロッパに於ては、日本についてのみならず、東洋一般の研究も漸く其の緒にいたばかりで、この道に進む学徒の困難には言い得べからざるものがあつたのであります。イタリアに於ても、僅かばかりの、そして不完全な辞引、遠い日本との交通の不便、それに加えて、日伊両国の国交は凡ての方面に於て、未発展と云う悪条件が揃つていたのであります。日本国内について云いまして、その頃は明治維新後間もないことで、文教機構の整備時代でありまして、学術的研究の文献も少なかつたのであります。従つて、ヨーロッパ人にとつて、それを手に入れることは、高価であると共に、非常な困難をともしなかつた訳であります。今日に於ては、ヨーロッパの日本研究学徒は、仕事に必要な書籍は、殆ど理想的と云つてもよい程のものを、好きにだけ、しかも簡単に手に入れる事が出来ます。その上、日本及び欧米に於て、三代乃至四代に亘つてなされた研究の文献をも、参考出来ると云う有利な立場に置かれております。彼は殆ど完全に近い、日英、日仏、日独辞典を利用し得る外、日本で出版されている所の、歴史大辞典、地理事典、演劇辞典、人名事典、及び種々の専門雑誌をも参照出来ると云う、この上もない好条件に恵まれているのであります。

然し、セヴェリーニやヴァレンツィヤーニの時代には、そんな参考書は全々存在しなかつたのであります。しかも、この二人は、何んなにか切望したのであります。一度も日本を訪問する機会に恵まれなかつたのであります。

それ等を考え合はせませう時、彼等の進んだ道が如何に険しいものであつたかが解るのであります。言わば、彼等の頼りとするものは、自分の力以外にはなかつたのであります。それにも拘らず、彼等の翻譯に一度目を通す時かくも大

きな時代の差と云うものが認め難い程で、今日の恵まれた手段に依つてしても、恐らく、より優れたものは出来ないだらうと思われる程の出来ばえを、そこに見出すのであります。そして、彼等は、きつと生れ乍らの鋭い文学的直感に依つて、難句や、解釈に迷い易い章句を、正確に判断したに違いないと思わしめるものを、そこに数々見出すのであります。

セヴェリーニとヴァレンツィヤーニが、かくも困難な条件の下で、屈することなく東洋研究に一生涯を捧げ得たのも、恐らく、彼等の心深く根ざした所の、中国や日本の文化に対する愛着が、鞭撻となり又、行く手を照す光明となつたからだと思は思ふのであります。

彼等の後継者である不肖我々は敬虔の念を以てこの二人の先駆者の業績と、努力の跡を永く記憶しなければならぬと思ふ次第であります。

漢代豪族論

名古屋大学教授 宇都宮 清吉

従来の秦漢史研究は制度史の面では、相当に精密なものがあり、その伝統も通典以来の久しいものを持つている。第二次大戦後の我が邦でも、その精密さと伝統は一層強められて来ている。その理由は研究の自由確立ということも勿論あるけれども、木簡とか古墳出土品とかいう新史料が驚異的に出現したことが大きい刺戟となつていたと思われる。しかし一方、このような精密な制度史研究の存在にも関らず、秦漢時代の社会関係や権力構造を充分見きわめて、中国史全体の中に、その正しい位置と意義とを決定しようという試みは、必しも少なかつたとは言わないが、少くと

も成功的であつたとは言えない実情にあるようだ。このような研究上の欠陥に就いては一九五〇年代は容赦なき指摘の時代であつたといえよう。西嶋定生氏や増淵竜夫氏や浜口重国氏の論著は、このような容赦なき過去の成果への批判からの再出発であるところに、何にもまして意義深いものを見出すのである。

私はこのような学界の伝統の中で、一方では中国国民革命の激動期の刺戟をうけつゝ、その伝統をぬけ出た新しい秦漢史の研究を進めたいという念願をもちつづけて来た。その思想的路線は概して言えば、中国国民革命下の多くの知識人たちを動かしていたデモクラシーであり、リベリズムであり、ナショナリズムであつたといつてよい。これらの思想的態度は実は我が邦においても、己に中正な人々にとつては、一つの伝統ともなりつゝあつたものといえるであろう。私は当時必ずしも有力でなかつたとはいえない唯物史観に立つ人々の中国史研究法には従わないで、却つて新しい伝統となりつゝあつたりベリストの研究態度に多くのものを学んだのである。

私の秦漢史研究は一九三〇年代から始められた。それは私の個人的理由からではあつたが、六朝史研究から溯るといふ仕方ではなかつたのである。その個人的理由とは私が大学院学生として研究生生活を始めた丁度その時岡崎文夫氏の「魏晋南北朝通史」(一九三三年)という名著が出版され私は、この書を愛読し研究し多くのものを教えられたからであつた。岡崎氏は一九三五年に就いて「南北朝における社会経済制度」を著わされたが、私はこの書を批評することによつて、自らの研究課題を豪族史と決定し、その学問的要請によつて秦漢時代の豪族史研究を当面の主題とするに至つた。このようにして進められた私の研究の一つは「漢代における家と豪族」(一九三九年、史林)として、一つは「秦漢政治史」(一九四一年、支那地)として一応まとめられた。時間的にこの両作の前後に書いたもの、あるいは一九五〇年代になつ

て新しく書いたものは、多くは、この両作の内容を拡充することを目的としたものであつたといえるであろう。

かくて私の漢代豪族論は専制君主たる皇帝権力による秩序と、それに反抗する豪族という古代帝国内の矛盾とその発展が秦漢史の本質をなすという風に把握されたのであつたが、これに就いては一九五〇年代に浜口重国氏を始めとして、増淵竜夫氏・西嶋定生氏の鋭い批判が与えられ、私は非常に多くを学ばせられたと同時に、また私なりの反批判をも行うことができたのである。今こゝでその詳細を述べることは出来ないが、いずれ東方学第二十三輯にこの講演の全文を載せることになつていたので読者はそれを見ていただきたいと思う。

漢代の王国

日本大学教授 鎌田重雄

漢の封建諸侯には二通りある。諸侯王（単に王ともいう）と列侯とである。諸侯王の封地は王国（時に藩国ともいう）、列侯の食邑は侯国という。

漢の高祖は、はじめ異姓の功臣を諸侯王に封じたが、やがて異姓を排除して同姓血縁者をもつてこれに当てた。同姓諸侯王の封地は広大で、漢の直轄郡は全国の約三分の一しかなかつた。血縁の稀薄化に伴う諸侯王の離心的傾向の増大と王国領地の広大を恐れた漢朝は、王国の中央集権化につとめ、王国の矮小化を推進していつた。この漢朝の王国抑損策について漢書卷一四諸侯王表第二の前文には「文帝は賈生の議に采りて斉・趙を分ち、景帝は鼂錯の計を用いて呉・楚を削る。武帝は主父の冊を施して推恩の令を下し、諸侯王をして戸邑を分ち、以て子弟を封ずるを得しむ。黜陟を行わずして藩国おのずから析る。」と記している。

高祖は、血縁的紐帯の弛緩から起る王国の離反に備えて、王国に対し種々の制約を加えていた。第一は、王国の官制に対する制約である。王国の官制は漢朝のそれとほとんど同じであつたが、諸官のうち、王の輔導に當る太傅、國民を治める内史、武職を掌る中尉、衆官を統べる丞相が、王国の最高幹部で、高祖はこれら四大幹部の上にさらに相国を置き、この相国をして王国政治の監視に当らせたのである。しかもこの相国と王の輔導役たる太傅とは漢朝の任命に関わり、内史以下は王国の任命によるものとはいひながら漢朝の許可のもとに任命し得たのである。次の恵帝のとき王国の相国は省かれたが、漢朝はさらに丞相の任命権を握つて王国の規制につとめた。景帝の時、呉楚七国の乱後は、漢朝は下級官吏を除く他の一切の官吏任命権を掌握し、諸侯王の流民権を剝奪し、諸侯王は王国の租税に衣食するのみとなり、かくて漢朝は王国の郡県化にほぼ成功したのである。高祖の王国規制の第二は、発兵権の制約であり、その第三は相統法である。牧野巽博士の「西漢の封建相統法」(「支那家族研究」所収)によれば、漢の封建相統法として嗣封と紹封とあり、嫡子による相統を嗣封、嫡子以外の者による相統を紹封といい、紹封は例外的恩惠のものであつて、嗣封が正規の相統法であり、かかる相統法は秦に発生したもので、天子および一般官民には適用されず、封君特有のものであつた、という。高祖のとき、子に非ずして国が除かれた例はないが、牧野博士も推論されている通り、高祖のときからかかる封建相統法は存在したものであろう。

高祖・恵帝・呂太后稱制を経て、代王恆が即位し文帝となつた。文帝即位の際の競争者は齊王襄と淮南王長(文帝の異母弟)であつた。齊王襄とその弟の朱虛侯章・東牟侯興居とは呂氏の乱を鎮定し文帝迎立に大功を立てたから、章・興居はそれぞれ趙王・梁王たることを大臣たちに約束されていた。しかるに文帝は、彼ら二人が齊王襄を擁立す

る志のあつたことを知り、それゆえに彼らを王たらしめず、即位二年に文帝は自己の皇子を王となす前提として、章を城陽王に、興居を濟北王とした。城陽も濟北も齊王国に属する郡であつたから、ここに齊王国は三分されたわけである。濟北王興居は不満と不安の余り文帝の三年に叛を謀つて失敗、自殺した。濟北国はかくて漢の直轄郡となつたが、文帝は城陽王ら齊一族の不満を緩和するために、齊王襄の兄弟十人を濟北郡内に列侯として封じた。嫡子以外の者が濟北国内に封地をもつのであるから、これは紹封制の拡大利用である。文帝六年に淮南王長が謀反自滅するや、文帝は淮南四王子を淮南故地に列侯としたが、のちに淮南は三王国に分割された。また同時に齊王国は七王国に分かたれた。齊・淮南等の分国は賈誼の分国論に従つたものである。賈誼の分国論は次のようなものであつた。

諸侯王の地を割くのに次のように制を定める。齊・趙・楚をあらかじめそれぞれ幾つかの国に分けておき、齊悼惠王・趙幽王・楚元王の子孫をして順次に父祖の分地を受けさせる。しかし分地が尽きたならば子孫の受封を停止する。燕・梁その他の王国もみなそのようにする。その分地の数が多く子孫の数が少ない場合は、余剰の分地を空にしておき、その子孫の生まれるのを待つて受封させる。もし諸侯王が有罪で、その封地の多くが漢朝に没入されたときには、残存の封地が小さいために子孫が受封できない場合を生ずる。そこで、その王国内にある侯国を他所に徙し、あるいはまた王国内に封地を得られない子孫を他所に封ずる。かくして、漢朝は削つた数だけ償還することになる。こういふふうにするれば、天子は一寸の地、一人の衆も利得することなく、分国の効を挙げることができ、天下はよく治るのである。(漢書賈誼伝)

賈誼の論は、王国の細分化による王国抑損策であり、それは明らかに「割地」であつて「削地」を主眼とするもの

ではない。諸侯王が有罪によつて削地されても、その子孫には削地に引き合ふ数の土地を償還して受封させ、そして分国の目的を達しようというのである。文帝の斉・淮南の分国の際にとつた措置は全く賈誼の分国論に一致する。

文帝は、治世二十三年のうち元年から十六年までの間、斉を中心とする対諸侯王策を講じ、ついに十六年に賈誼の分国論に従つて斉を七王国に、淮南を三王国に分割した。賈誼の死後、文帝に用いられて対諸侯王策を建言したのは晁錯であつた。晁錯は諸侯王削弱策を建言したが納れられず、かえつて皇太子（後の景帝）が錯の計を支持したのである。景帝即位するや、錯を重用し、錯は諸侯王の罪過を求めてその支郡を削りはじめた。かくて呉楚七国の乱が起つた。この乱は晁錯の削地に端を發したことは事実であるが、さらに文帝即位にまつわる斉一族の不满および文帝が終始斉を圧迫したことに対する不满がその根柢にある。呉楚七国の乱後、楚以外の六国はしだいに景帝の皇子を以て埋められ、また王国の治民権は剝奪され、諸侯王は国の租税に衣食するのみとなり、王国の郡県化は進んだ。

景帝の次の武帝は、元朔二年に主父偃の冊によつて推恩の令を下した。この推恩の令は、「諸侯王がその子弟に封地を分与して列侯とすることを願ひ出れば、朝廷はその封号を定めてやり、そして嫡子以外の王子侯の国は改めて漢の郡に所属せしめる」というものである。この推恩の令によつて、諸侯王の子弟は、嫡子以外の者も封地を得られることになり、しかもそれが成文化・法令化されたわけであり、このことは西漢封建相統法の緩和、紹封制の拡大を意味する。また王子侯の侯国は漢の郡に所属することになつたのであるから、これは漢朝の郡県体制の推進である。而して推恩の令は、王国を分析・弱小化せしめるものであるから文帝の分国策に通ずる対諸侯王策であることは明らかである。また王子侯国を漢の直轄郡にくり入れるのであるから、これは景帝の削地策にも通ずるものである。すなわ

ち武帝の推恩の令は、文帝の割地策と景帝の削地策とを止揚したものと見えよう。

推恩の令は、元鼎五年の酎金律と合わせ考えらるべきものである。元朔二年に推恩の令が発せられ、それから十五年を経た元鼎五年に酎金律が施行された。この律は、正月旦に釀し八月に成る酎を宗廟にささげるかわりに、列侯はその戸口数に応じて黄金を宗廟に献じ、その際目方が足りぬとか色が悪いという名目のもとに列侯が国を除かれた律である。武帝時の王子侯の総数一七八人のうち亡後あるいは有罪によつて国除されたもの四八名に対し、酎金律による国除は六四名である。漢書武帝紀によれば酎金律によつて国除された列侯は一〇六人とあり、王子侯の六四名はその半ば以上に及ぶ。しかも元鼎五年の酎金律によつて国除された王子侯は、後に至つても紹封復家したものがない。しかるに王子侯ならざる他の列侯の場合は、たとい酎金律によつて国除されても紹封復家の恩恵が与えられたものがある。かくみると、酎金律の主たる対象は王子侯にあつたとみることができよう。武帝は、諸侯王をしてその子弟に封地を分与することを許し、そしてそれら王子侯の封国を漢に所属させることによつて一応王子侯を郡県体制の中にくりこみ、しかる後に酎金律によつて王子侯国の多くを完全に県に化し、かくして王子侯国を中央集権化していつたのである。

武帝以後、王国は事実上郡県化され、その領域も小さくなり、漢初の数郡にわたるような王国は皆無となり、たいはいは一郡一王国であつた。この状勢は後漢にも引きつがれ、後漢はさらに王国は小さくなり、一郡内の数県を以て王国が構成された。また後漢の経術主義によつて、現皇帝の皇子の王国は、先帝の皇子の王国より小さくされた。

漢の国家構造は、「内外の区別」という意識を基調として成立していたと思う。いわゆる郡県の官僚や封建の諸王・侯は内臣を形成し、これに対応して属国の王・侯などは外臣を形成した。ところで、このような内外の区別に立つ臣属者も、漢の皇帝の統制下にあるという点では共通した性質をもつ。したがって、皇帝の統制下にありうる条件を分析してゆけば、内臣・外臣という区別の成立する事情も明らかとなる。以上のような観点に立つと、次のように結論できる。

すなわち、概括的にみて、内臣とは漢の皇帝の徳化をうけ皇帝の制定する礼・法を奉ずる分子、外臣とは漢の皇帝の徳化をうけ皇帝の制定する礼に従うのみで法を奉ずることのない分子であつたと。そして、朝貢国は漢の皇帝の徳化をうけるだけで礼・法ともに独立し、臣属関係に入らない分子、さらに、礼・法はもとより、徳化をうけることもない分子は対国（敵国）として意識されていた。

このような事情が判明すると、頂点に皇帝を戴く漢の国家は、皇帝の徳・礼・法という三要素が、いかに作用しているかということを基準にして形成されていたことが知れる。

ただし、具体的な現われ方としては、内外の両要素を含む中間的分子もあれば、また内臣の中には内賓臣・内客臣と称すべき分子があり、外臣の中には外賓臣・外客臣と称すべき分子もあつたが、これらの特殊な分子も、三要素の組み合わせ方の相違、または作用する三要素の各々の力の強弱の程度の相違によつて成立した区別にすぎなかつた。

このようにみると、漢の国家構造を問題とするとき、範囲を内臣層に属する郡県と封建の王侯国に限るのは妥

当な方法ではない。内臣層とともに外臣層をも含めて取扱わなければならない。漢と朝貢国との関係を分析することも必要となる。

なお、漢の皇帝の徳・礼・法という三要素の組み合わせと作用に視点を合せて考察すると、漢の国家構成分子には、前記の内臣属者や特殊分子の他にも、皇帝との間に関係の存しうる特殊な分子を生み出すことができる。それらの中の幾つかは、史料の上からも存在の事実を裏付けることができると思うが、この問題は後日にゆずる。

〔主なる引用史料〕史記・漢書の淮南王劉長伝・南越伝・匈奴伝。漢書の西域伝・王莽伝。韓詩外伝にみえる周公説話。漢代文献にみえる漢の公印に関する記載。

漢末王莽時代における第二次農地の崩壊と農民叛乱

東京教育大学助教授 木村正雄

戦国から秦漢時代にわたつて、殷周時代以来山間河谷地帯を中心に多数点在併存し続けてきた第一次農地のほかに、第二次農地と呼ぶべき極度に人為的な広大な農地が、それまで乾燥や洪水のために不可耕地として放置されていた広開低平な平野部（北方屯田地区、滑水盆地、黄河下流大平野、淮河下流平野など）に、大規模に開拓された。原始的邑の基礎である第一次農地では、春秋中期以後生産関係が変化して、単婚家族毎に分割所有される民田制となり、邑の県化が行われたが、しかしその農耕を支えている治水水利機構は分割私有し得ず、従つて家産単位の自律生産は行われず、土地私有は貫徹されず、自由な市民は成立せず、農民は局地生産体に隷属する必然性を持つていた。そのような局地生産体の指導者乃至支配者が豪族であつて、従つて旧県は本来豪族を中核として局地的に自立する性格

を持ち、中央集権の必然性を持つていなかつた。第二次農地にはもとと人が居住していなかつたので、開拓に伴つて徙民が行われ、そこを公田として仮作させるか、民田として分与した。しかもそこは大規模な治水水利機構に支えられていたので、単婚家族毎に自律生産を行えないのは勿論、県毎に局地生産体を作ることもできず、もつと大きな国家生産体を作るほかになかつた。即ち第二次農地を基礎とする新県及び新県民は、必然的に中央集権を要請し事実中央に依存したのである。そして県というのは本来そのようなものであつた。従つて古代帝国の中央集権的性格は本来このような新県と新県民が下から必然的に要請したもので、戦国七雄中最もはやく最も典型的に新県を設置した秦が中国を統一したのも当然であつたし、同時に新県の数が旧県の半分という秦が安定を欠いたのも当然であつた。漢代に入つて黄河下流などを中心に第二次農地の開拓と新県の設置が進み、新県は旧県の三倍にも達したので、中央集権は一応安定したが、漢末から王莽時代に、儒家的政治思想にもとづく治水水利政策の変更で、これまで行われてきた堤防壅塞などの方法が排され、従来の治水水利機構が放置された結果第二次農地従つてそこにおかれた新県は決定的に破壊され、生産力は極度に低下した。その結果相対的人口過剩即ち飢饉、流亡などの現象が広汎におこり、新県の殆んど半数は廢止された。王莽時代からはじまつた赤眉、銅馬などのおびただしい叛乱集団はまさにこのような第二次農地に発生したもので、その流動的所在寇略的性格は、その構成が流亡農民を主体とし地方郷村的統制的機構を出なかつたことなどと併せてまさに農民叛乱といふべく、光武集団など第一次農地を中心とする豪族叛乱集団とは性格と類型をことにするものといわなければならない。そしてこのような叛乱の類型的区別は古代各王朝末の叛乱にどれにもあてはまり、結局古代の農民叛乱は、典型的には第二次農地を中心に展開したものとといわなければならない。

い。(県の新旧別及廃止の地図、並びに統計省略)

漢代の租税形態

立命館大学教授 平中 峇次

漢代の租税や財政に関する研究には、大正年間すでに加藤繁博士の「算賦に就いての小研究」や、「漢代における国家財政と帝室財政との区別、並に帝室財政一斑」の名著があり、また昭和になつて宮崎市定博士の雄篇「古代支那賦税制度」が著され、漢代の賦と税の別について論及された。その後、吉田虎雄氏は戦時中に支那税制史の第一巻として「両漢租税の研究」を公刊され、漢代の相税全般にわたつて精細な研究を発表された。わが国における研究の進展に呼応して、中国においても漢代の租税および財政の研究は盛況を呈し、馬非百氏や黄君黙氏や周筠溪氏などの「食貨」半月刊を中心とする諸家の著作が続出した。かくして漢代税制の研究は一時隆盛を極めたが、それ以後これに関する研究は殆ど進展を見ず、甚だ不振の状況を示している。その原因は、漢代の租税に関する主要な史料は殆ど利用しつくされ、租税の種目も殆ど究めつくされて、新たに研究する余地はもはや存しないかの如く見えたからである。しかし、従来の研究を眺めてみると、そこにはなお多くの不備な点が見出される。例えば、それらは租税を制度としての面で把えるに止まり、これをその時代の政治過程や経済過程のなかで生態的に把える点では欠けていた。また、租税を制度的側面で把えるにしても、只これを課税対象に従つて区別するだけで、その租税的性格を明らかにし課税目的に従つて分類するという試みは殆どなされなかつた。その例をあげれば、馬牛羊などの家畜に税が課せられるのを牲畜税と呼び、山沢園池などで採取漁獵することに税が課せられるのを山沢園池税と呼ぶ類であつて、それ

がどのような課税目的を持ち、いかなる租税形態に属するのかは殆ど究明されなかつた。

戦後のわが国における漢代租税の研究は、上にあげた二つの点で戦前の研究の欠陥を補う方向に進んでおり、永田英正氏の「漢代人頭税の崩壊過程」(東洋史研究十八の四)や、木村正雄氏の「秦漢時代の田租とその性格」(歴史学研究三三三号)などはその代表的な例である。木村氏が漢代の田租を国家の治水灌漑権能から生産税と規定されたことに對して、私は異議を唱え、「漢代の田租と災害による其の減免(上)」(立命館文学二七二号)のなかで之を国家による土地領有的地代と認めるべきことを主張したが、それはともあれ、漢代の租税の研究がその租税形態の分析の面においても、政治経済過程の探求の面においても、今後一層の進展が期待されることは、わが国の東洋史学のため喜ばしいことである。

3 研究会

東洋文庫談話会

昭和三十六年四月十五日「ベトナムから帰つて」

昭和三十六年五月六日「韓国最近の史学界」

昭和三十六年六月十七日「インド旅行報告」

昭和三十六年七月十九日「オランダにおける東洋学の現状について」

三根谷 徹

高麗大学校教授

李 弘 種

北 村 甫

ライデン大学教授

フリッツ・フォス

昭和三十六年十月三日「グーテンベルヒ大学教授ヘルムート・シール、パリ大学教授レイ・バザン両氏を囲む会」

昭和三十六年十月七日「アメリカにおける蒙藏研究の現状」

岡田英弘

昭和三十六年十月二十一日「清国行政法について」

坂野正高

昭和三十六年十二月十六日「清末の郷紳」

市古宙三

昭和三十七年二月十七日「高句麗の五部について」

末松保和

研究発表要旨

「韓国最近の史学界」

高麗大学教授 李 弘 植

第二次大戦後、韓国の独立と共に、日本支配時代に下積みの生活を送った人々が、李丙燾博士の震檀学会を中心として国史学界を形成した。これらの人々によつて国史教本が編纂され、歴史教育の問題がとりあげられた。初期には日本植民地時代の反動として、極端なナショナリズムの傾向も一部に見られたが、次第に着実な研究に向い、ソウル大学歴史学科の活動など見るべき成果を上げるようになった。「震檀学報」の発刊等もその一つであり、又一九五〇年の動乱迄の安定期には、若い研究者を交えて論集「歴史学研究」が刊行されている。

朝鮮動乱の渦中で博物館や旧奎章閣蔵書等を戦火から救うべく大変な努力を費したが、学者の生活も悲惨を極め、釜山方面に戦火を避けつゝなお「歴史学報」の発行が行われた。又、軍の被護に頼らねばならぬ事情の下でのアカデミックな研究として、高麗朝以来の水軍史の研究が組織されたりした。

現在ソウル大学のほか、師範大学、延世大学等が研究の中心をなし、震檀学会の「震檀学報」、釜山の歴史学会の「歴史学報」、韓国史学会の「史学研究」、師範大学の「歴史教育」、延世大学の「東方学志」、「学林」、「人文科学」、ソウル大学論文集、「人文社会科学」、高麗大学「文理論集」、同亜細亜問題研究所の「亜細亜研究」等が主なる学会誌・機関誌となつている。戦後の研究の中には、大院君時代の鎖国政策や、近世産業史についての注目すべき成果がある。

又、言語、文学の研究も進み、資料の刊行としては「竜飛御天歌」、「郷歌麗語」、「訓民正音」等の註解をはじめ各種辞典が出され、古語、方言の研究も盛んとなつた。国語国文学会、韓国経済学会、韓国民俗学会、韓国社会科学研究会等の関連分野の各学会誌も注目する必要がある。史料覆刻刊行事業としては「歴代王朝実録」、「高麗史」、「東国輿地勝覧」、「東国正韻」、「文献備考」、「備辺司謄録」等が出された。

尚、国学研究論著総覧刊行会によつて、李崇亭を担当者として「国学研究論著総覧」（一九六〇年）が刊行されているので参照されたい。

アメリカに於ける蒙蔵研究の現状

岡 田 英 弘

私は一九五九年九月、フルブライト交換学生としてワシントン州シアトルのワシントン大学に赴き、その極東・ロシア研究所に於いて N. Poppe 博士の指導の下に蒙古学・アルタイ比較言語学を修め、また T. Wylie 博士に就いてチベット学を学んだ。Poppe 先生は既に他に二人の学生を持つていた。J. Bosson 君は Sa-skya Pandita の「善語宝蔵」の蒙古訳に関する Ph. D. 請求論文を書き上げて一九六一年夏アンカラ大学に留学した。彼は非常な秀才で

私について滿洲実録滿文の講読も受けていた。もう一人は内蒙古ホルチン部の台吉^{タイジ} Uensechen 君で、元朝祕史第九卷についてこれまた秀れた修士論文を書き、今もワシントン大学助手として働いている。学生ではないが同じく先生の講筵に列席したのは L. Hurvitz 博士で、専門は支那仏教史、大学では日本語を教えていたがこれも語学の天才で、世界のほとんどあらゆる文化語に精通する。彼の主催した多国語仏教文献の講読では、梵・藏・蒙・漢・滿の各種テキストが比較訳出されたが、私は滿蒙文及び漢文の一部を担当した。ロックフェラー財団の計画になるチベット研究センターは、アメリカではワシントン大学に設けられ、Sa-skya-pa の Bdag-chen 一家と二人の Dge-lugs-pa が印度から招かれたが、その中でも前者の師傳たる Khams-pa Bla-ma の Sde-gzhung Rin-po-che は驚くべき博覧強記の大学者であらゆる典故に精通し、一所に住んでその指導を受けていた G. Smith 君は大いに益する所があつた。同君は Sa-skya-pa の歴史に大いに興味を有して種々資料を採集する一方、言語学的にも精密な研究を行つていた。一九六一年初頭に一時シアトルに來訪したダライ・ラマの長兄 Thub-bstan Jig-med Nor-bu (Stag-tsher Rin-po-che) は A-mdo 方言の資料を提供するだけでなく、チベットグループと研究者側との橋渡しに重要な役割を演じた。最後のラサ駐在イギリス代表であつた Hugh Richardson 氏も一九六〇年秋よりワシントン大学において演習等を受け持つていた。なお長くアムドのチベット遊牧民の間に宣教師として働いた R. Ekvall 氏も著作に従事していた。ウィーン人の Swami Aghananda Bharati は、今は Syracuse に去つたが、私などと共にタントラの講読会を開き、ラマたちを請じて質疑を行つた。

一九六一年春、シカゴの Association for Asian Studies 大会に招待された私は、会場に於つて O. Lattimore

博士に会つた。博士は間もなく蒙古人民共和国の招待に応じてウラインバートルを訪れるところであつた。ヴァージニア州アーリントンでは隠棲中の A. Mostaert 神父にお目にかかり、ボストン郊外のハーヴァード大学では、E. Cleaves 博士のお世話になつた。ハーヴァード図書館には各種版本のチベット蔵経及び蒙文タンジュールの完本が蔵されているのに感謝した。同じくここで知り合つた O. Prissak 博士は間もなくワシントン大学のトルコ学副教授として赴任した。かくして二年間にわたつた留学を終り、一九六一年九月、日本に帰つて来たのである。

「清国行政法」について

坂野 正 高

臨時台湾旧慣調査会の告書「清国行政法」全六卷（明治三十八年—大正三年、別に索引一冊）は我が国行政法学界の先駆者の巨匠であつた織田万博士（明治元年—昭和二十年）が、狩野直喜博士を始めとする数人の中国史の専門家の協力をえて、彼の壮年時代の精力を傾けつくして編述したものである。本書は、決して制度の断片的解説の集積でもなく、単なる編集物でもない。欧洲大陸公法学、殊にフランス公法学の影響を深く受けた明治のリベラリスト織田博士の法学者としての発想がすみずみにまで貫いた一つの統一ある作品である。

「清国行政法」は、一くちに言えば、大清会典・会典事例を今様解釈で現代風に書き直したものといえる。官制中心に編成された会典の体系はバラ／＼に解体されて、織田博士の立てた「近世法理」による綱目によつて再構成されている。試みに本書の目次を、彼の「行政法講義」（明治四十三年）の目次と比べるならば、双方の構成がその大綱において類似していることは誰の眼にも明かであろう。このように近代公法学の体系で全体を再構成したということ

は、とりもなおさず、近代的な法概念を清国制度にあてはめようとしたことを意味する。併しながら、ここで注意すべきことは、近代的な歴史性をもつ概念（例えば「行政」、「地方自治」、「警察」など）をそのままでは、清国にあてはめることができないことを十分に承知した上で、これに一定の限を加えて敢てあてはめようとしていることである。このような概念の操作方法は何を意味するか。一言にていうならば、それは歐洲の大陸諸国——「近世法治国」「立憲国家」——の法制をモデルとして「専制政治」の清国の法制を批判的に解説しようとしたものである。

本書はこのように、いわば「近世ノ立憲国家」対「専制政治」という二分法的な価値の尺度、二分法的な時代区分に立つている。そこには立憲国家の「近世」と専制政治の「古代」のみがあつて中世がない。そして専制政治の清国は当然に文明開化の近世的な立憲国家へと進歩すべきものであり、又、現に徐ろにその方向へ進みつつあるものとされたのである。

もう少し立ち入つていうと、織田博士が清国制度を調査するに當つて頭に描いたモデルは、中央集権的官治行政組織と近代内閣制度をそなえ、活潑なる地方自治にさゝえられた権力分立の近代的立憲君主国家であつた。かゝるモデルを規準とした場合、清国はこのモデルの諸要素のいづれを含まないいわばネガティブな諸特徴をそなえたものとしてとらえられたのである。例えば、清国が極端なる地方分権制度であることが繰返し問題とされている。このようなネガティブな接近方法は本書の方法の特長であると共に、弱点でもある。近代的な観点からする鋭い否定的批判はでて来るが、清国の制度をいわば内側から構造的にとらえることはできないであろう。

〔附記〕この折の報告において述べさせて頂いたことにさらに検討を加えてまとめたものとして、坂野正高「日

本人の中国観——織田万博士と『清国行政法』——（『思想』、一九六二年二月号、五月号）を参照されたい。

清末の郷紳

市古宙三

清末郷紳の地方における勢力は、一九世紀中葉の太平天国の乱後に、いちじるしく大きくなる。それは王朝末期にみられる一般的現象といつていいが、清末においては、この一般的傾向のほか、全くそれとは反対の、郷紳の勢力拡大を阻止するものがあらわれる。すなわち西欧近代文化の浸透である。したがって、一般的にいえば、清末の郷紳は洋務・変法・革命、いずれの近代化の運動にも反対なのであつて、戊戌新政失敗の根本原因は、そこにあるといつても、過言ではあるまい。

しかし、日露戦争後になると、清朝政府は内外の情勢から、憲政施行を決意しなければならなくなる。政府をしてかく決意せしめたものは、革命を避けんがためである。郷紳もここに及んで、政府と同じく、革命の暴動を回避して、立憲運動に熱意を示すようになる。而して郷紳の意図する立憲政治は、清朝政府の企てるような中央集権的なものではなく、地方自治を極度に重んずる地方分権的なものであつたから、郷紳もしだいに反政府的となつてくる。もつともかれ等は、暴力革命を最もおそれるが故に、革命運動にくみしない。しかし一九一一年、現実に革命蜂起が武昌にあらわれると、郷紳は革命をさけるために革命にくみし、革命の成果は安全にすいとつてしまふ。したがつて袁世凱の政権は郷紳の政権でもある。しかして郷紳は地方分権的であるから、袁世凱が中央に権力を集中しようとするれば、当然に袁はかれらの攻撃をうけねばならず、袁の死後はまた当然に、地方分権的な軍閥抗争の時代へと移行してゆく。

4 展 示 会

第四十八回展示会

東洋文庫蔵東アジアに関する辞書展示会

昭和三十六年十一月十一・十二日 於東洋文庫

東洋文庫に所蔵する辞書の総数は莫大なものである。これを全部開陳することは到底不可能に近い。したがって今回はこれらの中で多少とも珍しいものを選んで展示した。出陳物は東アジアに限ったがその内容は次の通りである。

地 域	種 類	番 号
一 中国語の部	一八	一一一八
二 朝鮮語の部	五	一九一三
三 満洲語の部	三	二四一六
四 蒙古語の部	四	二七一三〇
五 シベリヤ語の部	五	三一三三
六 チベット語の部	五	三六一四〇
七 ビルマ語の部	四	四一四四

八	泰國語の部	四	四五―四八
九	カンボヂャ語の部	三	四九―五一
十	ラオス語の部	二	五二―五三
十一	ベトナム語の部	五	五四―五八
十二	フィリッピン群島語の部	二	五九―六〇
十三	東インド諸島語の部		
	1 インドネシア語	一	六一
	2 ジャワ及その附近語	五	六二―六六
	3 スンダ諸島語	一	六七
	4 ボルネオ語	一	六八
	5 ミクロネシア語	一	六九
	6 メラネシア語	四	七〇―七三
	7 ポリネシア語	二	七四―七五
十四	日本語の部	九	七六―八四

その他、珍本、主として日本近世の手校本一一一部も添えて展示した。

5 図書の収蔵及び閲覧

財団法人東洋文庫は、一九一〇年代までの中国に関する欧文文献のほぼ完璧なコレクションであるモリソン文庫（約二万四千冊）を中心とする洋書およそ三十万冊、さらに三千部に及ぶ中国の地方志や同じく八百種に達する族譜などを含む漢籍・朝鮮本・満洲本・蒙古本・安南本・西藏本・梵本・暹羅本など約五十万冊、また我が国の広橋家文書などの古文書・古版本・古写本・江戸時代の文学書、名家の自筆本・旧蔵本を系統的に収めた岩崎文庫（八千四百十二部、およそ三万八千冊）を主とする和書、その他、稀覯書写真、ロートグラフ、並びにマイクロフィルム約十万冊を所蔵している。

図書に関する業務は、現在、資料室、洋書目録室、和漢書目録室、および閲覧の各室に別れて行っているが、目録整理と閲覧業務とは国立国会図書館支部の管掌となっている。本年度における各室の事業の概況は左の通りである。

A 資料室

1 資料調査

(イ) 新着図書目録

和書

一―三分冊

洋書

一―三分冊

(ロ) 交換、購入蒐集必要出版物の調査目録を作り検討した。

一 邦文定期刊行物関係目録

一冊

二 中国文定期刊行物関係目録

一册

三 欧文定期刊行物関係目録

一册

2 資料購入

区分	和漢書	洋書	計
逐次刊行物	四八	三一八	三六六
単行本	三五七	一四五	五〇二
計	四〇五	四六三	八六八

(数字は冊数を示す)

3 資料整理(製本)

区分	和漢書	洋書	計
逐次刊行物	一三一	二二三	三四四
単行本	三	一二	一五
複写資料	二八一	三〇	三一
計	四一五	二五五	六七〇

(数字は冊数を示す)

4 資料交換

区分	受			贈		寄		贈	
	和漢書	洋書	小計	国内	国外	計	計		
逐次刊行物	二四九九	八七一	三三七〇	四七九	二三三二	二八一			
単行本	五三〇	三九七	九二七	七五六	三九二	一一四八			
計	三〇二九	一二六八	四二九七	一二三五	二七二四	三九五九			

(数字は冊数を示す)

B 国会図書館支部東洋文庫事業概要

一 図書の入、整理

(1) 洋書目録室

上半期(四~九月)

増加図書の入、分類記入、基本カード、複製カードの作成約一、〇〇〇部 (Kazakh 及び Russia 本が多かつた)

モリソン以来 Pamphlet として別置されたものを整理し、配架し直した。既に General Reference Works 及び East Asia, India, Japan の部は整理し印刷目録に記載したが近々将来 China の部を全部

整理して印刷目録に記載する予定で此の方を重点的に調査した。

下半期（一〇—三月）

増加図書の入入れ、分類記入、基本カードの作成、およそ一、六〇〇部（此の中には開国百年記念文化事業会よりの寄附図書一〇五冊も含まれる）当文庫の *Periodicals* の配置が不適當であつたのでこれを従来の国語順の排列を尊重しつつ新しい分類表を左の如く作製した。

XVIII

Periodicals

A *Catalogue*

B a. *English*

b. *American*

c. *Missionary Publications*

d. *Miscellaneous*

C a. *French*

b. *Miscellaneous*

D a. *German*

b. *Miscellaneous*

E *Other languages*

- a. 1. Netherlandish, 2. Miscellaneous
- b. 1. Finnish, 2. Hungarian
- 3. Turkish, 4. Miscellaneous
- c. 1. Swidish, 2. Norwegian, 3. Danish
- 4. Polish 5. Italian 6. Miscellaneous
- d. 1. Slavic, 2. Zzechtc, 3. Miscellaneous

F Year books, & C.

G China, Maritime Customs

H Newspapers (Daily & Weekly)

- a. Japan
- b. China
- c. Miscellaneous

これに従つて E. Other languages の a, b, c に函架番号を附して整理した。更に A. は既に終り B. a の部を目下進行中である。欠号を検出し、目録を作成している。

(2) 和漢書目録室

(イ) カード作製

- a. 和漢書の分類、書名カード作製、漢籍（四、三六四枚）、和書（三、五二四枚）、逐次刊行物（二四〇枚）
- b. 既排架カードの調査、補充
- 。既排架目録カード中分類番号のみありて、カード無きものゝ調査、整理、補充（一、一〇〇枚）
- 。閲覧室用書名カードの整理、補充（カードの紛失せるもの）補正（記載不備のもの）、漢籍（三四三枚）、和書（七五枚）
- 。事務室用カード作製中（五〇〇枚）
- (ロ) 作製カードの分類、排架
- (ハ) 和漢書に関するリファレンス（三七〇件）
- (ニ) 和漢書新排架本（購入、寄贈、写真複製本）中、和装本及び帙の題箋かき。（五五〇枚）
- (ホ) 製本、製帙の事務
- 。製本（和装本一七一冊、洋装本三〇冊）
- 。製帙（二八三套）
- (ヘ) 複写フィルム of 保管及び保管カード作製（二七〇枚）
- (ト) 地方志追加目録作製中
- (チ) 展示会出品和漢書の解説作製（二〇種）
- 二 図書の閲覧及び考査

(1) 書庫内整理及び書籍の移動、不明図書リストの作製

場所 二階旧館(洋雑誌及びオールド・ブックス)

二階新館(洋書、パンフレット、邦・中文雑誌)

地 階(和書)

期間 昭和三十六年五月～七月、同年十一月～十二月

担当者 長本英雄、渡辺 健、村越 晃

責任者 渡辺兼庸

(2) 書籍点検

場所 全 階

期間 昭和三十七年三月二六～三一日

責任者 渡辺兼庸

(3) 昭和三十六年度図書閲覧状況

月	開館日数	利用者数	一日平均	前年同月との比	利用図書数	一日平均	前年同月との比
四	二四	一六七	七弱	一一九減	二、〇四六	八四弱	二、六七一減
五	二五	三一	一三弱	一二増	三、五二五	一四一	七三九減

累年度計	三	二	一	一二	一一	一〇	九	八	七	六
二八七四、〇八七	二〇	二四	二二	二三	二二	二六	二四	二七	二五	二五
	一六九	二〇五	一六二	三五八	三四八	四三一	四八二	六一八	五〇一	三三五
	八強	八強	七強	一六弱	一五強	一七弱	二〇強	二三弱	二〇強	一三強
三九八八增五八、九七二	七〇減	七增	一八減	四增	二五減	九三增	一二四增	一八四增	四增	四八增
	二、七三八	四、一三七	二、八五七	六、二九四	六、六三八	七、九八七	七、二五〇	一、四八四	八、四九五	五、二七五
	一三七	一七二	一三〇	二七三	三〇二	三〇七	三〇二	四二五	三四〇	二一一
五、七七三冊增	八四五增	一、九七一增	四六八增	一〇二增	一、〇四〇增	三、五八四增	一、九七七增	三、二四〇增	一、七八二增	一、五七八增

年度	開館日数	利用者数	利用図書数
三三二	二九〇二	九九八六九	四二二二
三三三	二八九三	二二四六六	九八四四
三四	二九六三	九三六六九	八〇五五
三五	二九六三	六八九五三	一九九九
三六	二八七四	〇八七五八	九七二二

学校別利用者数(三六年度閲覧票発行者数)

中央	一	駒沢	二	成城	一	東京女子	六	ハーバート	二	共立女子	二
東洋	四	大正	三	法政	三	聖心女子	一	国際キリスト教	一	東京学芸	一〇
明治	二二	東京	二九	日本	三	日本女子	六	東京教育	二七	東京外語	三
上智	六	立正	一	東北	二	二松学舎	一	お茶の水	一四	東京農業	一
慶応	九	広島	二	京都	一	京都女子	一	東京都立	六	横浜国立	一
高知	一	山形	二	早稲田	一〇	北海道	一	国学院	大一二	横浜市立	二
計	三六校										一九五名

昭和三六年度末現在 閲覧票発行数 一、五七九
 昭和三六年度分 一、三四三、一、五七九 二、三六名
 内訳

専門研究者 二九名 一二%
 大学生 一九五名 八三%
 その他 一二名 五%
 大学教員 二〇
 高校教員 九
 大学院 三九
 学部 一五六
 男女 一七九

月	和書		漢書		洋書		總部數
	部數	冊數	部數	冊數	部數	冊數	
四	五七	一一七	一三一	一、六五九	一七七	二七〇	三六五
五	二二二	五七三	二二六	二、四五二	二五六	五〇〇	六九四
六	一六〇	二五七	三七六	四、四五七	二六〇	五六二	七九六
七	二二三	五四八	六三〇	七、四八六	二二六	四六一	一、〇六九
八	二七六	六二一	八四一〇、一四八	三、二九〇	三五八	七〇六	一、四七五
九	一四四	三四一	六四四	六、二九〇	三九九	五九九	一、一八七
一〇	一三八	三三〇	六六四	六、九八五	一八三	四六三	九八五
一一	一六一	四五九	四八九	五、七七一	一九三	四〇一	八四三
一二	二〇五	六三七	四二七	五、〇〇九	三八一	六四八	一、〇一三
一	一八九	六〇九	一七三	二、〇一五	一三七	二二三	四九九
二	一九六	四五九	四四〇	三、三八五	二一五	二九三	八五一
三	一五八	四六九	二六七	二、一二三	一〇一	一四六	五二六

6 資料複写

資料複写事業には、東洋文庫がみずからの所蔵資料を一層充実せしむるための、図書収集事業の一環をなすものと、広く内外研究者・研究機関の閲覧・利用の便に供するために行う資料複製サーヴィスとがある。前者については研究活動との連関においてのべる。後者については、本年度実績は左記の如くである。

資料複製サーヴィス

(イ) マイクロ写真複写

申込件数	駒数	焼付引伸	ポジフィルム
三八九件	五四、一二八コマ	四六、八六二枚	一二、一六五吹

(ロ) 写真依頼本の調査 二三〇件

7 情報連絡

今年度における東洋学インフォメーション・センターの事業内容は次の通りである。

一、一般情報事務

1. インフォメーション・サーヴィスの一つとして東洋文庫の海外連絡事務、例えば外国からの問合わせに対す

る回答、出版物やマクイロ・フィルムの注文、交換及びその決済事務等を担当している。

2・内外学者への便宜供与として外国人研究者のために他の研究機関への紹介、翻訳者、通訳のあつせんから宿舍旅行等の便宜をはかつている。一九六一年九月東洋文庫の附置機関、ユネスコ東アジア文化研究センターの主催で行われた「東アジア地域研究機関代表者及び専門家会議」には全員で協力した。

二、アジア研究に関する一般的情報の提供

1・内外の研究者及び研究機関の要覧の作成

a. 国内のアジア関係の研究機関についてはかねてから資料の蒐集を行つて来たが此の度その結果が英文で *Research Institutes for Asian Studies in Japan, Directories No. 1, A5, pp. 120, 1962* として前記ユネスコ東アジア文化研究センターより出版された。

b. 国外の研究機関及び内外の研究者のリストについては目下資料を蒐集中である。

2・内外出版物の書目の年次書目の作成

a. 国内関係では、採録の対象となる文献目録の種類をアジアに関する人文・社会科学における日本人による調査研究の主題別文献目録、学者の著作目録日本国内の主要図書館並びに研究所の蔵書目録に置いた。現在一九五八・五九年度出版物のうち、雑誌関係八割、単行本関係五割五分程度を終った。採録カード数約四、五〇〇枚。

b. 国外で出版されたアジア関係の書目については、*Journal of Asian Studies* の *Bibliography* を

にカードに採録。カード数は約五〇〇枚である。

三、アジア研究に関する特殊な情報の蒐集及び出版

1. 「日本における漢籍の蒐集（漢籍関係目録集成）」一九六一年、A5判、二〇二頁を出版した。
2. 「アジア言語の研究と教授法」をアンケートに依つて得た資料をもとに編集集中である。
3. 「マスコミに現われたアジア（一九六二―六三）」はアジアの諸問題が日本のマスコミでどのように扱われているかを調べるために、朝日、毎日、東京、日経の四大新聞の一九六一年六月以降一年間の切抜きを蒐集したものである。目下資料を分類中である。
4. 「一九五〇年以後中国で刊行された中国考古学研究論文カード作成と整理」を行つているが、一九五九年度分まではカードの作成整理ともに完了した。

六 研究調査活動

1 東洋学連絡委員会

財団法人東洋文庫は、戦前からの活動実績により、東洋学研究総合センターとして、広範な研究者の共同利用と一般公開性を具え研究者に対する便宜供与を行い、専門分野に於ける国内的及び国際的連絡の中心としての役割を果すことを広く期待されている。従つてその諸事業を、広く全国的組織による東洋学者の総意を反映して運営するため、

昭和三十三年より、東洋学に関する主要な研究機関及び研究分野の代表者に依頼して東洋学連絡委員会を組織し、文庫の事業計画を審議し報告をうけ、助言を行うものとした。

本三十六年度の委員会は左記の如く行われた。

春期 五月二十九日(月)

報告 昭和三十五年度事業報告

議事 (イ) 昭和三十六年度事業計画

(ロ) ユネスコ東アジア文化研究センター設置について

秋期 十一月十四日(火)

報告 昭和三十六年度事業中間報告

議事 (イ) 昭和三十七年度事業計画案について

(ロ) 任期満了に伴う改選の件

(ハ) 近代日本研究室兼任研究員任命について

2 機関研究

研究課題 「イスラーム諸国の社会構造の研究」

研究担当者 榎 一 雄

研究協力者

荒松雄（東京大学助教授） 蒲生礼一（東京外国語大学教授） 嶋田襄平（中
央大学助教授） 土井久弥（東京外国語大学助教授）、 遠峰四郎（慶応義塾大学講師） 本田実信（北海道
大学助教授） 松田寿男（早稲田大学教授） 松村潤（東洋文庫研究員） 三橋富治男（千葉大学教授）、
護雅夫（東京大学助教授） 和田久徳（お茶の水大学講師）

本研究は、文献の蒐集に重点がおかれており、同じ趣旨のもとに実施されてきた昭和三十三年・三十四年・三十五年
年度総合研究の継続事業であるので、過去三ケ年の蒐集を基礎として、これを拡充することを旨とし、(1)アラビア語
文献、(2)ペルシア語文献、(3)トルコ語文献の三種を重点的に購入した。この場合とくに現地刊行のものを主としたが、
ペルシア語文献については大英博物館所蔵のサファールヴィー朝関係の写本を焼付け研究者の便宜に供した。なお購入
した図書は、アラビア語関係二三四冊、ペルシア語関係一九八冊、トルコ語関係二一八冊のほか、イスラーム関係定
期刊行物のバック・ナンバー九種一二〇冊に及んでいる。（詳細は「東洋学報」第四十四卷三号彙報「最近東洋文庫に
おいて蒐集せる西アジア地域の諸文献」参照）

今年度まではアラビア・ペルシア・トルコの三地域について、それも現地刊行のものを重点的に蒐集して来たが、
今後これと併行して欧米刊行の研究書も組織的に蒐集せねばならない。そして更には残りの中央アジア（特にロシア
領トルキスタン）・インド・中国（特に新疆省）関係の文献蒐集を予定すると共に、日本にこれまで集められている
関係資料、研究書等の調査と研究状況の調査に当らねばならない。

研究課題「中世以降における東アジア諸地域の貴重文献の整理研究」

研究担当者 岩井大慧

研究協力者

今井吉之助（尊経閣文庫長） 榎一雄（東京大学教授） 織茂三郎（蓬左文庫主任） 金倉円照（東北大学名

誉教授） 河野六郎（東京教育大学教授） 末松保和（学習院大学教授） 鈴木俊（中央大学教授） 田川孝

三（東洋文庫司書） 田村実造（京都大学教授） 塚本善隆（京都国立博物館長） 長沢規矩也（法政大学教

授） 仁井田陞（東京大学東洋文化研究所教授） 福井康順（早稲田大学教授） 松本信広（慶応義塾大学教

授） 宮崎市定（京都大学教授） 山本達郎（東京大学教授） 吉川幸次郎（京都大学教授） 米山寅太郎

（静嘉堂文庫長） 和田清（東京大学名誉教授）

本研究は、昭和三十四年度以降二ケ年に亘り行つてきたものゝ継続で、(1)十七世紀以前に撰述刊行された貴重朝鮮本のマイクロフィルム撮影(2)米回国会図書館所蔵中国貴重文献（旧北平図書館蔵本）のマイクロフィルム撮影を行い、広く学界の利用に供することを目的とし、目録を作成すると同時にその書誌学的研究を行つてきた。三十四・五年度において、朝鮮本一、三二二部、一一、三七九巻、六、七一〇冊、中国本一、五九五部、一七、二一六巻、七、二七三冊を蒐収し、(1)中世朝鮮語資料としては全くその存在の知られなかつた重要な諺文資料を発見し、(2)法制資料並びに文化史、政治史関係資料に関しても同様の貴重文献を発見することができた。(3)旧北平図書館蔵中国善本は、我が国に全く存在しない資料にのみ重点を置いて収集したために、宋元明時代に関する文献学的研究に広範囲の資料を呈供

することとなつた。その他多くの未調査の新文献を得たが、明代地方志等をはじめ、中国・朝鮮の社会文化研究上に大きな寄与をなしうるものと信ずる。

本年度の調査研究は、前二年度の残務整理として行つたが、特に楠本正継博士所蔵の朝鮮本、山口女子短期大学図書館寺内文庫朝鮮本及び山形産業文化会館、同県立図書館所蔵本を調査して目録を作成、また宮城県立図書館（一六部、六四巻、四一冊）足利学校遺蹟図書館（六部、四三巻、四三冊）宮内庁書陵部（四三部、五四三巻、二一一冊）静嘉堂文庫（二七部、二八二巻、一七六冊）所蔵の貴重な朝鮮本を撮影した。今後は蒐集文献の公開のための目録の完成と、十五〜十七世紀朝鮮文献年表並びに朝鮮貴重本の解題目録、李朝会要の編集、宋明清代関係資料の調査利用等が残された課題である。

3 各種研究委員会研究室

第一部 近代・現代アジア研究

近代日本研究室

近代日本研究室は、「開国百年記念文化事業会」よりうけついだ（昭和三十五年三月三十一日）近代日本関係資料を基本として、アジアの近代化という広い連関の中での、日本近代史の研究を進め、同時に広く外国人東洋学者の近代日本研究にも便宜を計りうるよう、基礎的調査事業を行つてきた。本年度の事業は左の通りである。

(一) 「東洋文庫所蔵近代日本関係文献目録 和書マイクロフィルムの部 第一分冊」を刊行した。(B5版一六

四頁 五〇〇部)

- (二) 近代日本史関係基礎資料の調査、同研究グループ及び機関の活動調査に関しては、下記の機関についてこれを行つた。(一部継続中) 文部省史料館(近世以降明治年代にいたる庶民生活資料) 東大史料編纂所(元明治維新史料) 国会図書館憲政資料室 外務省外交文書室 東大明治新聞雑誌文庫 早大図書館(洋学資料) 早大隅研究室(明治政治資料) 神奈川県立金沢文庫(開国資料) 国際文化振興会(KBSライブラリー等) アジア財団図書館常民文化研究所 大原社会問題研究所(法大内) 民族学研究所(成城大学内) 国立教育研究所 昭和女子大学近代文学研究室 竜門社(渋沢家蔵資料)

近代中国研究室

近代中国研究室は、昭和二十八年以来設立準備をすゝめ、二十九年十一月、ロックフェラー財団の財政的援助を得て発足、できるだけ広く異つた分野の研究者を集めて、政治的偏見をはなれた実証的研究を行うことと、各国との研究上の自由な交流とをめざして活動してきた。本年度の事業は左の通りである。

(一) 現代中国経済関係文献目録作成

東洋文庫蔵書及び近代史研究室別置図書から関係図書を選び、更にこれに中国研究所の蔵書で東洋文庫にならぬものを選び加えた。所収図書、約一、三〇〇部。カード目録として整理し、内容による分類を行い、近代史研究室に備え付けてある。それ以外に書名排列によるリストも作成してある。

(二) 東洋文庫蔵現代中国関係図書目録作成

現在集められている図書数は次の通りである。

近代史研究室別置図書——中国文三、八五〇部 日本文三、一二〇部 欧 文一、四二一部

東洋文庫蔵書——現在中国文のみ、現代中国関係図書約二、〇〇〇点を選んだ。

上記の図書について著者排列、書名排列のカード目録を作成し、現在分類目録を作成中である。欧文図書は著者目録を印刷する予定で準備中である。

又上記の一部分をなす新収図書について「新収中国文新聞雑誌目録」を刊行した。

(三) 近代中国関係資料の調査整理

中国研究所、東大東洋文化研究所等の国内研究機関、図書館収蔵の近代中国関係資料の調査及び近代中国主要人物伝記資料カードの作成を行っている。

第二部 東アジア研究

敦煌文献研究室

敦煌文献研究室は、榎一雄氏の努力により昭和二十八～三十一年度文部省科学研究費交付金をうけて撮影せる、ブリテイッシュ・ミュージアム所蔵スタイン収集敦煌文献を始めとして、国内・国外の現存西域出土古文書・古文獻の所在調査、写真撮影・収集・整理及び目録の作成等を行つてその研究の推進を図り、内外における諸機関並びに研究者間の研究情報・連絡、研究上必要な資料の公開、複写サービス等をも行つてきた。

本年度は三十五年度に引き続き研究委員鈴木俊氏を代表者とする文部省科学研究費交付金による総合研究課題「西域出土古文書・古文書の調査研究」を行つた。

(1) 西域出土文献写真の蒐集整理

国内諸家所蔵唐代文書、藤井有隣館所蔵唐代文献の焼付写真、パリーのビブリオテーク・ナショナル所蔵ペリオ将来文献中の医薬文献マイクロフィルム及び焼付写真を蒐集し、整理した。

(2) 研究論文目録カードの補充、一九六〇年度、六一年度分。

(3) 東洋文庫収蔵スタイン将来敦煌漢文文献写真総合分類目録作成。

スタイン文献の分類カードは先年一応作成せられていたが、敦煌文献の全容が次第に明らかにされるにつれ分類及び記載事項に改良補訂を加え、それを基礎として非仏教文献目録草稿を作成し（一部未了）索引を作成中である。

(4) 「中亜発見漢文文献研究提要」（仮題）を指して「研究文献に引用紹介せられたる西域出土古文書、古文書分類参考目録及び関係文献索引」の草稿を作成した。（古文書のうち七世紀以前十一世紀以降の分及び寺院文書の一部は未完。）

(5) 西域出土文献資料叢刊準備計画として「西域発見中国印刷術史資料」の整理を行つた。

尚敦煌研究の国内的、国際的センターとして次の事業を行つた。

(6) 国内における敦煌関係研究論文別刷を收拾して大英博物館及びビブリオテーク・ナショナル宛に送付する事業。

(7) 国内で出版された西域文献関係書籍を購入送付すると交換にビブリオテーク・ナショナル所蔵文献のマクロ

フィルム写真を入手する事業。

その他、国内マイクロ写真サービス特別事業として北海道大学・九州大学へのスタイン将来敦煌文献焼付写真全部の複本作成送付事業（各文部省科学研究費機関研究）及び高野山大学・明治大学等への変文・譜文資料・文書資料の焼付写真の送付を行った。これら敦煌文献関係写真はその仕上り点検に関し、文献の内容に関する知識を必要とするので、すべて敦煌文献研究室で行っている。

宋代史研究室

宋代史研究室は、昭和二九年以来、ヨーロッパにおいて企画された宋史提要編纂に関する国際的協力事業を行い、昭和三十一年以来、(1)宋代史研究文献目録及び提要の編輯、(2)宋代政治史年表の作成、(3)宋代主要文集、宋代名人伝記、墓誌銘等の索引の編輯等を行ってきた。本年度の事業は左記の通りである。

(1) 「宋代研究文献提要」(A5判 八四二頁 八〇〇部)の出版

本書はハーヴァード・エンチン研究所より出版補助金を支給された。

(2) 宋代研究文献提要の英文翻訳

(3) 宋代政治史年表の原稿作成

前年度に引き続き百衲本宋史本紀に基き、続資治通鑑長編その他、宋会要食貨、職官志、宋史選舉志等の関係記事と対照、校合、補訂して、政治史年表原稿の基本カードを作成した。更にかねての懸案であった思想、宗教及び美術方面についても年表原稿のカード作成につとめた。

(4) 宋代主要文集索引の作成

前年度に引き続き楽全集・忠肅集・嘉祐集等の文集の中から重要項目を択んでカードに摘録した。

(5) 宋人伝記索引原稿作成

宋代の著名人の伝記を神道碑・墓誌銘・地方志人物伝等からカードに必要な記事を摘録、文庫所蔵の宋人文集、地方志、金石文献についてはほぼ完了した。

(6) 宋代関係文献目録カード作成

内外の宋代史関係文献の目録作成のためのカード作成、及び同「文献速報」を Sung project のパリ本部及び国内関係者に頒布した。また年代別地方行政区劃地図作成の準備作業として、基礎資料の蒐集に努め、特に現在世界地図中でも最古のものに属する京都東福寺塔頭栗棘庵所蔵「輿地図」のマイクロ焼付写真を作成した。

明代史研究室

明代史研究室は、中国近代化の前段階としての明代史の研究を推進するため、アメリカにおける明代伝記事典編纂事業との協力において、明代基礎史料の調査を行っている。本年度は、(1)引続き明代関係資料(特に日本現存明人文集)綜合目録編纂事業の基本カード作成と、(2)明代研究文献の調査及び研究文献目録カードの補充訂正を行った。

清代史研究室

清代史研究室は、東アジア全域に及ぶ広大な清帝国の支配について、その成立過程を中心として研究をすすめる、特に清初史料の整理を行ってきた。昭和二十八年以来継続してきた「満文老檔」訳註事業はその成果である。

(1) 「満文老檔」の訳註刊行（ハーヴァード・エンチン研究所補助金及び文部省研究成果刊行費補助による）

満文老檔は清朝初期、すなわち太祖、太宗二朝にわたる三〇年間（一六〇七—一六三六）の編年体の記録であり、清朝初期の史料の中核をなすものであると同時に、満洲語研究資料としても極めて重要なものである。訳註に當つては現在京都大学文学部に所蔵されている内藤湖南博士将来に係る奉天故宮崇謨閣蔵の有圈点満文老檔（*Tongki fuka sindaha hergeni dangse*）の写真を底本として、これをメルンドルフの鬺字方式によつてローマ字に転写し、共同研究によつて逐語訳と意訳とを行つている。すでに太祖の部分三冊と太宗天聰の巻二冊を刊行し、本年度はそれに続く太宗崇徳の巻の巻一より巻二十五まで、天聰十年正月より崇徳元年八月までの部分を収めた。又残りの巻二十六より巻二十八までの訳註原稿を作成したが、これは「満文老檔Ⅶ（太宗4）」として明三十七年度に、太宗の巻の総索引を付して刊行する予定であり、本巻を以て訳註は完了の予定である。

(2) 満洲語辞典類の整理

清朝で編纂された満洲語辞典類の整理は数年前からこれに着手しているが、本年度も引続き「旧清語」と「大清全集」の整理にあつた。

(3) 清太宗実録諸本の校勘

満文老檔の索引の作成に併行して、漢文の清太宗実録諸本の異同を校勘し、その中に現われる固有名詞の索引作成を行い、太宗崇徳元年までの部分を完成した。

朝鮮研究室

昭和三十四年度より継続せる文部省科学研究費交付金機関研究C「中世以降における東アジア諸地域の貴重文献の整理研究」により左記の事業を行つた。

一、我国に存在する朝鮮本の調査撮影（三七函、九二部、九三二卷、四七一冊、三、四二四四コマ）

宮内庁書陵部、静嘉堂図書館、足利学校遺跡図書館、宮城県立図書館

二、米国会図書館所蔵北京図書館善本のマイクロフィルム撮影（三八函、七二部、一、〇六五卷、五一四冊、三、〇一六八コマ）

三、国内の朝鮮本の調査

博多楠本正継博士所蔵本、山口女子短期大学図書館所蔵本、寺内文庫所蔵本、山形産業文化会議所々蔵本、山形県立図書館所蔵本

四、撮影文献書名カード作成及び朝鮮文献年表カードの作成。

第三部 中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム研究室

アジア地域の基礎的研究に対する要望に依りて、文部省科学研究費の総合研究に昭和三十三年度からいわゆる別枠として「アジア地域の社会、経済構造」の研究が認められ、全国二〇余の研究機関が参加して、それぞれの分担研究課題のもとに事業が進められてきたが、東洋文庫においても、本研究室を中心にイスラム地域の専門の研究者の参加

協力を求めて、分担課題「イスラム諸国の社会構造」の実施にあつて来た。中央アジア・イスラム研究室はその遂行を担当してきたが、本年度はこの研究費交付の方法に一部変更が見られ、文献蒐集の部門は文部省科学研究費機関研究Bとして行われ、総合研究としては各研究機関相互の連絡と協力が重点が置かれ、合同研究会の開催や「連絡季報」の刊行がなされた。しかし実質的には従来の継続に他ならず、本研究室においても昨年度に引きつゞきトルコ語、アラビア語及びペルシア語文献の組織的蒐集にあたり所期の成果を収めた。これらの図書については、日本学術振興会より刊行せられる「アジア地域総合研究文献目録」第4巻及び東洋学報四十四巻四号彙報欄に掲載されている。

なお三十六年十月には、ユネスコ東アジア文化研究センターの開所に伴う「東アジア研究専門家および研究機関代表者会議」のために来日せるドイツの H. Scheel 氏、フランスの L. Bazin 氏の要望により東洋文庫において日本のトルコ学者との懇談会を設け、今後の協力について話し合い、具体的な問題としては *Philologiae Turcicae Fundamenta* の第三巻の編集が採り上げられた。今後の成果が大いに期待される。

チベット研究室

チベット研究室は、昭和三十一年以来東洋文庫収蔵チベット語文献の整理研究と、蔵和辞典の編集を行つて来たが、その基礎の上に立つた言語学的、宗教学的、歴史学的な総合的チベット研究を行うことを目指している。本年度の事業は左の如くである。

(1) 蔵和辞典の編集

辞典編集資料の補充、整理を続け、Chandra Das「蔵和辞典」、Les Missionnaires Catholiques du Thibet:

Dictionnaire 'Thibétain-Latin-Français' 翻訳名義大集種本のカード化を完了した。今後は他の諸研究を通じて資料を補充していく方針である。

(2) 十三世ダライ・ラマ伝記の研究

ハーヴァード・エンチン研究所の補助金による昭和三十五年度よりの三ヶ年計画で、十三世ダライ・ラマ全書中の伝記の部の訳註作成を目標に開始したが、本年度は伝記上巻の読み合わせを終った。

(3) 日本現在蔵外チベット文献の調査

東洋文庫所蔵蔵外文献目録の作成を目標とし、前年までに作成した文献基礎カードを整理し、とくに分類等の検討を行った。

(4) チベット大蔵経総索引の作成

イタリア中東亜研究所との提携事業としてチベット大蔵経総索引の作成を企画、日本側の分担案を検討中である。なお、三十六年度より、ロックフェラー財団補助金により、欧米のチベット研究センターと連絡をとりつゝ「チベット人との共同によるチベット語、チベット史、ラマ教の総合的研究」を開始した。本年度より三ヶ年計画でインドよりチベット人学者を招聘、その協力を得て次の諸研究が進行中である。(詳細は、「東洋学報」第四十四卷一号集報、「東洋文庫におけるチベット研究について」参照)

(1) 現代チベット語辞典編集を目標とする記述的研究

(2) 古代・中世チベット史の重要史料の研究

(3) ラマ教 新・旧両派の比較研究

第四部 東南アジア・インド研究

南アジア研究室

南アジア諸国は歴史的にも社会的にも極めて複雑で、多くの重要な問題を含んでいるにもかゝらず、未開拓な分野が多い。本研究室は、南方史基礎資料の蒐集整理とその調査を行う。その一環として、

(1) オランダのハーグ国立古文書館 (*Algemeen Rijksarchief*) 所蔵オランダ東インド会社到着文書集 (*Overgomen Brieven*) を中心とする関係史料の基礎調査、目録作成を昭和三十四年以來行つてきた。本年度も引き続き一六八〇年末に到る部分のマイクロフィルムよりのタイプ転写と、東京大学史料編纂所々蔵写真・既刊文書集目録との対照索引作成の作業を継続した。

(2) 東南アジア青銅器文化関係資料の整理

研究員梅原末治氏蒐集の東南アジア出土銅鼓の拓本を、松本信広研究員の下で整理研究しつゝある。

4 研究者養成

東洋文庫は、戦前より研究活動の一環として、東洋学各特殊分野の次代を担う専門研究者を養成するため、研究生の制度があつた。従来、わが国においては、東南アジア、チベット、インド、イスラム圏及び中央アジア、滿蒙等、

特殊な言語・文字の修得を前提とする研究分野は、基礎的資料の集収も不十分で、その重要性にもかゝらず甚だ立ち遅れていた。戦後特にこうした未開拓分野の振興を目的として、戦前からこれら現地語資料の集収に努力を払ってきた東洋文庫は文部省の補助を得、研究者養成制度が復活された。更に右の特殊分野以外についても、ハーヴァード・エンチン研究所よりの援助金を得て大学院博士課程修了程度の人材に引続き数年研究の機会を与え、後継研究者の養成が行われてきた。文部省及びハーヴァード・エンチン研究所補助金による、本年度の研究は左記の通りである。

「近代中国排外運動の研究」

佐々木 正 哉

「サキヤ派史の研究」

金子 良 太

「中世蒙古史の研究」

岡 田 英 弘

「六朝隋唐制度史の研究」

菊 池 英 夫

「周代青銅器文化の研究」

西 田 守 夫

（チベット語学研究のため在仏）

山 口 瑞 鳳

5 職員の研究業績

青山定雄

(論文) 「五代末における福建の新興官僚について——特に系譜を中心として——」(「中央大学文学部紀要」二四号、

史学科七号 七三一—〇五頁 一九六一年十二月)

生田滋

(論文) 「東南アジアにおける貿易港の形態とその機能——十七世紀初頭のバンタムを中心として——」(『世界の

歴史』13〔南アジア世界の展開〕、二五五—二七〇頁 筑摩書房 一九六一年十一月)

(翻訳) ヘンドリック・ハメル著『朝鮮幽囚記』(一)(二)(『朝鮮学報』一九・二三輯、一九六一年四月・十一月)

(紹介) イスカンダル「ヒカヤットアチェ」(『東洋学報』第四三卷四号、一一八—一二八頁、一九六一年九月)

池田温

(論文) 「中国古代墓葬の一考察——随葬衣物券について——」(Transaction of the International Conference of

Orientalists in Japan. No. Vol. 1961, pp. 51~60)

(講演) 「唐代の造籍手続きについて」(法制史学会東京部会、於専修大学、一九六一年七月八日)

市古宙三

(論文) 「郷紳と辛亥革命」『世界の歴史』15 (帝國主義) 九三—一二八頁、東京 筑摩書房一九六二年二月)

岩井大慧

(論文) 「遊牧民族鮮苔資料匯集」(遊牧社会史研究) 第7冊 早稲田大学東洋史研究室・遊牧社会研究グループ刊 一九六

二年二月 三〇頁)

「各国の西域探險と伝教」(下)『駒沢史学』九号、一八一—二六頁、一九六一年二月)

The 17-Article Constitution of Crown Prince Shōtoku (Memoirs of the Research Department of Toyo

Bunko, No. 20, 1961)

岩生成一

(著書) Japans Daghegester gehouden in't Comptoir Nangasackij, Anno 1829 en 1830. 2 Vol. (Tokyo

1961. Nichiran Koshō Kenkyūkai)

(論文) A Dutch Doctor in Old Japan. (Japan Quarterly. April-June 1961. Vol. VIII. No. 2. pp. 170~178)

「朱印船貿易に関する補足的史料」『日本歴史』第一六一号 二—八頁、一九六一年十月)

梅原末治

(編著) 「日本支那古銅精華」第三冊 (大阪山中商会 大版 一九六一年四月)

「日本支那古銅精華」第四冊 (大阪山中商会 大版 一九六一年十一月)

(論文) 「銅鐸の二つの型式」(『ミュシウム』第一二二号 一九六二年四月) 「日本上古の鑄鏡」(『ミュシウム』第一二三

号、一九六一年六月)

「新たに見出された鸚鵡鏡」(「大和文化研究」一九六一年七月)

「殷墟殷墓の骨牙容器」(中央研究院「慶祝董作賓先生六十五歲論文集」下卷、一九六一年八月)

「椅子の石製模造品」(「大和文化研究」六ノ一、一九六一年十一月)

〔講演〕「古鏡より観た日本の上古」(京都大学読史大会特別講演、一九六一年六月十一日)

「大陸文化と日本の古文物」(法隆寺夏期大学講演、一九六一年七月二十六日)

「銅利器より観た殷代の文化」(東方学会総会講演、一九六一年十一月十三日)

「印度支那の青銅器時代—銅鼓に聯関して」(慶応大学三田史学会講演、一九六一年十一月十六日)

榎 一 雄

〔著書〕 An Appendix on the Chinese Manuscripts, Catalogue of the Tibetan Manuscripts from

Tun-Huang in the India Office Library by Louis de la Vallée Poussin. Oxford Univ.

Press, 1962, pp. 52~65.

〔論文〕 Yü-ni-ch'êng and the site of Lou-lan. (Ural-Altaiische Jahrbücher, XXXIII, 1~2, 1961, pp. 52

~65).

〔紹介〕 ペリオ著『マルコ・ポーロ注釋第一』(「東洋学報」第四三卷三号、九二一九四頁、一九六一年六月)

〔講演〕 「邪馬台国再論」(日本大学史学会例会 一九六一年三月二七日)

岡田英弘

(著書) 『滿文老檔』VI 太宗3 (東洋文庫叢刊第十二、東洋文庫 一九六二年三月) 滿文老檔研究会の一員として共同執筆

(講演) 「蒙古史料に見える初期の蒙藏關係」 (第六〇回史学会大会・東洋史部会一九六一年十一月十一日)

片桐一男

(論文) 「静嘉堂文庫所藏大槻家旧藏蘭書考」(下) (『文献』第五号 二二—二六頁、一九六二年六月二〇日)

「蘭医森田千庵伝研究」(『法政史学』第一四号 五三—九〇頁、一九六一年一〇月七日)

「蓬左文庫所藏尾張洋学館旧藏蘭書」(『蘭学資料研究会研究報告』第九八号、九—一六頁、一九六一年十一月一

八日)

「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」(『越佐研究』第一八集、五六—六二頁、一九六二年三月三一日)

(編書) 「金沢藩壮猶館旧藏蘭書目録稿」(『蘭学資料研究会研究報告』第九六号 一九六一年一〇月二日、一冊、沼田次郎

氏と共著)

「京都大学図書館所藏蘭書目録、附小石家所藏蘭書目録」(『蘭学資料研究会 研究報告』第一〇〇号、一九六一

年十二月一六日、一冊)

神田信夫

(著書) 『滿文老檔』VI (東洋文庫叢刊第十二、東洋文庫、一九六二年三月) 滿文老檔研究会の一員として、岡本敬二、石橋秀

雄、松村潤、岡田英弘の諸氏と共同執筆

〔論文〕「康熙帝—三藩の乱をめぐる—」〔世界の歴史〕11〔ゆらぐ中華帝国〕、二四七—二六〇頁、東京 筑摩書房、一九六一年九月

一九六一年九月

「袁崇煥の書簡について」〔駿台史学〕二二号 一一三—一八頁、一九六二年三月

〔動向〕「一九六〇年の歴史学界—滿洲・朝鮮」〔史学雑誌〕七〇編五号、一四九—一五三頁、一九六一年五月

〔紹介〕「哈仏燕京学社引得の覆印」〔史学雑誌〕七〇編一—二号、一〇八—一一二頁、一九六一年十一月

菊池英夫

〔概説〕「唐末五代史のとらえ方について」〔世界史研究〕第二八号、一一八頁、一九六一年六月

〔論文〕「節度使制確立以前における『軍』制度の展開」〔東洋学報〕第四四卷二号 五四—八八頁、一九六一年九月

〔動向〕「一九六〇年の歴史学界—回顧と展望—」〔史学雑誌〕七〇編五号 二二二—二二七頁、一九六一年五月

五月

〔講演〕「西域出土文書中の唐代軍制史料管見」史学会第六〇回大会・東洋史部会、一九六一年十一月十一日

河野六郎

〔論文〕「漢字音とその伝承」〔東京教育大学言語学研究会「言語学論叢」〕第三号 一九六一年十二月二十日

「古代朝鮮語の母音間の□の変化」〔朝鮮学報〕第二十一・二十二合輯 八四四—八四九頁、一九六一年十月

〔紹介〕「セリュイス著『方言』による漢代のシナ語方言」〔東洋学報〕第四三卷三号、八六一—九二頁、一九六一年六月

佐伯 富

〔論文〕「宋代仁宗朝における茶法について」〔岡山史学〕一〇号、一九六一年十二月

〔概説〕「宋と元」〔世界の歴史〕第六卷、共著、中央公論社 一九六一年五月

周藤 吉之

〔著書〕「宋代経済史研究」〔東大出版会、A5判、八二六頁、一九六二年三月〕

〔論文〕「宋朝国史の食貨志と『宋史』食貨志との関係」〔東洋学報〕第四三卷三号、一一四八頁、一九六一年六月

関野 雄

〔論文〕「中国の考古学—日本文化との関連性」〔日本歴史〕一六一号、七八—八五頁、一九六一年十一月

「先秦貨幣雑考」〔東洋文化研究所紀要〕二七冊、五三—一〇五頁、一九六二年三月

〔講演〕「中国考古学の問題点」〔高知県立図書館、一九六一年十二月十四日〕

田川 孝三

〔論文〕「李朝における僧徒の貢納請負—世宗末文宗朝を中心として—」〔東洋学報〕第四三卷二号、一一四—二頁、

一九六一年三月

「貢納請負の公認」〔朝鮮学報〕第十九輯、五五—一〇四頁、一九六一年四月

田中 正俊

〔概説〕「民変・抗租奴変」〔世界の歴史〕11〔ゆらぐ中華帝国〕、四一—八〇頁、東京 筑摩書房、一九六一年九月

(講演) 「中国史研究の方法―近代以前―」 (歴史学研究会、一九六一年十二月九日)

(書評) 「波多野善大著『中国近代工業史の研究』」 (東京大学東洋史談話会、一九六一年十月十四日)

(座談会) 「中国の近代」 (『世界の歴史』11「ゆらぐ中華帝国」、三〇〇―三二〇頁、東京 筑摩書房、一九六一年九月) 市古

宙三・小山正明・佐々木正哉・野村浩一・坂野正高・山辺健太郎の諸氏との談話速記

鳥 靖

(論文) 「初期議会における自由党の構造と機能」 (『歴史学研究』二二五号、一六頁―二九頁、一九六一年七月)

(書評) 「スカラビーノ著『日本―伝統主義と民主主義の間―』」 (『東洋学報』四三卷三号、一〇三―一〇六頁、一

九六一年十二月)

「唐木順三編『外国人の見た日本』四・大正・昭和」 (『日本史の研究』三六輯、二三―二四頁、一九六二年二月)

藤 晃

(講演) 「九世紀の敦煌石窟」 (内陸アジア史学会第二回シンポジウム三十六年十一月六日、於早稲田大学)

「敦煌学の現状」 (三十七年二月二十三日、於九州大学文学部)

松 潤

(著書) 『滿文老檔』V (東洋文庫叢刊第十二、東京 東洋文庫、一九六二年三月)

(講演) 「清初の宮殿について」 (史学会第六〇回大会・東洋史部会、一九六一年十一月十一日)

〔論文〕 「ウイグル文消費貸借文書」 (西域文化研究会編『中央アジア古代語文獻、西域文化研究第4』、二二一—二五四頁、京都、法蔵館、一九六一年三月)

「イスラーム世界帝国の完成」 (『世界の歴史』7「イスラーム文化の発展」、一九一—三二一頁、東京、筑摩書房、一九六一年四月)

「タンズイマート」 (『世界の歴史』7「イスラーム文化の発展」、二三三—二四七頁、東京、筑摩書房、一九六一年四月)

「ウイグル文売買文書に於る売買担保文言」 (『東洋學報』四四卷二号、一—三三頁、一九六一年六月)

〔翻譯〕 「ナスレツディンロホジャ物語——ホジャとティムール——」 (トルコ語) (『遊牧社会史探求』14冊、一—一八頁、一九六一年一〇月)

〔書評〕 “Türk Tarih Kurumu: Belleten, Cilt: XXIV, Sayı: 96, Ekim 1960” (『東洋學報』四四卷一号、一四六—一五二頁、一九六一年六月)

〔紹介〕 「ナスレツディンロホジャ物語」 (『史学雑誌』七〇編一〇号、六一—七三頁、一九六一年一〇月)

〔講演〕 「トルコロクレーターの背景」 (日本大学文理学部、一九六一年一月一日)

森 岡 康

〔論文〕 「仁祖朝における告尊長論について」 (『朝鮮學報』第二十二輯合併特輯号、一九六一年十月二十三日刊)

(講演) 「贖還被擄婦人の離異問題について」(第十二回朝鮮学会、於天理大学、一九六一年十月二十四日)

山根幸夫

(概説) 「明帝国の形成とその発展」(『世界の歴史』11〔ゆらぐ中華帝国〕、三―三九頁、筑摩書房)

「一条鞭法と地丁銀」(『世界の歴史』11〔ゆらぐ中華帝国〕、二八二―二九九頁、筑摩書房)

(講演) 「戊戌変法と日本」(東京女大比較文化研究所、一九六一年、十一月二十五日、公開講演会)

山本達郎

(講演) 「越南田簿の統計的研究——特に乂安省宜禄県上舎総と興元県海都総の場合を中心として——」(史学会第

六〇回大会東洋史部会、於東京大学、一九六一年十一月十二日) 酒井良樹との共同報告

(報告) 「第二十五回国際東洋学者会議(モスクワ)に参加して」(『東洋学報』第四三卷二号、一四七―一五〇頁、一九六

年三月)

附(一) 東洋文庫附置 ユネスコ東アジア文化研究センター

(The Centre for East Asian Cultural Studies)

ユネスコ東アジア文化研究センターは、東洋文庫の情報連絡機関としての機能に基づき、ユネスコの要望によつて、昭和三十六年七月一日東洋文庫の附置機関として設立せられた。

以来、ユネスコは一九五七年より向う十年間の継続事業として「東西文化価値の相互理解に関する重要事業計画」(The major project on the mutual appreciation of Eastern and Western cultural values)を推進しているが、この目的遂行に恒久的に貢献する施設 (associated institutes) として、まず一九六一—六二年度に東アジア(ビルマ以東)各国の研究機関の連絡網の中心となるべきセンターの設立が計画された。同じ趣旨による同様の施設がペイルート・ダマスカス、テヘラン、ニューデリー等のアジア各地にも設置せられつゝある。日本ユネスコ国内委員会は、これに呼応して、人文科学・社会科学の両分野に亘る東アジア地域の総合的文化研究を促進し、その成果を世界に紹介し、アジアに対する正しい理解を増進させるため、このセンターを東京に設置することとし、従来とも東洋学に関する国際的情報連絡機関としての役割をも果たしてきた東洋文庫に、これを附置することとなつた。

一 目 的

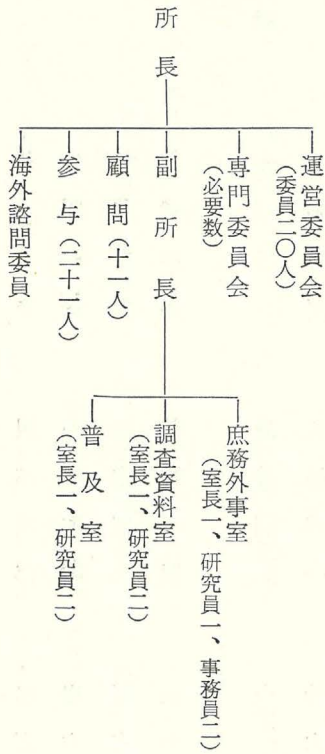
東アジア各国に於ける研究機関と連絡して東アジア(ビルマ以東)地域の各国に於ける東アジア文化に関する研究

(人文科学・社会科学)の情報・連絡を緊密にすると共に、その研究を促進し、且つ成果の普及を計る、いわばクリ
 アリング・ハウスとしての機能を發揮することを目的とする。

二 経 営

当センターの経費は政府補助金及びユネスコ援助金によつて賄われる。

三 機 構



四 役員及所員

所長 辻 直四郎

運営委員 *一又正雄

*岡野 澄

貝塚茂樹

桑原武夫

高橋幸八郎

顧問 大浜信泉

小島祐馬

高垣寅次郎

参与 青山秀夫

岩淵悦太郎

海後宗臣

鈴木俊

高橋長太郎

時枝誠記

東畑精一

服部四郎

*前田充明

松本信広

結城令聞

鳥養利三郎

久松潜一

和田清

石田幹之助

長尾雅人

丸山真男

宮本正尊

水野清一

岩生成一

*尾高邦雄

岸本英夫

*坂本太郎

*田中一松

金田一京助

鈴木大拙

石田英一郎

織田武雄

城戸又一

関口隆克

田村実造

*中村元

福井康順

*前田陽一

*山本達郎

*吉川幸次郎

原田淑人

宮沢俊義

岩井大慧

仁井田陞

宮崎市定

三上次男

渡辺進

(*印は 任期三年)

所員

副所長 榎 一雄

所員 生 田 滋 岩 崎 富久男 齋 藤 博 高 橋 竜 雄

田 中 時 彦 永 積 昭 二 宮 久 山 口 千 賀 子

平 野 豊 (東洋文庫総務部参事兼務)

松 村 潤 (東洋文庫研究部研究員兼務)

五 運 営

運営委員会 (委員二〇名) 事業の運営に関する事項を審議する。

顧問会議 (顧問一〇名) 所長の諮問に応じ、事業について助言する。

六 事 業

センターの行う事業の主なるものは左の如くである。

1 国際的協力による調査研究

2 内外研究機関との連絡および情報資料の交換

3 東アジア文化研究に関する資料の調査蒐集および交換

- 4 上記の諸事業、諸情報を速報する「東アジア文化研究」(センター機関誌、季刊)の刊行
 - 5 東アジア文化研究に関する諸資料の刊行
 - (イ) 内外研究機関及び研究者一覧
 - (ロ) 各種の文献目録類
 - 6 東アジア文化の研究成果の普及
 - (イ) 研究書・概説書の出版
 - (ロ) 非専門読者対象の読物「東アジア文化研究叢書」の編集刊行
 - 7 東アジア文化に関する、東アジア地域外(主としてヨーロッパ)に保存されている史料の調査
 - 8 内外学者の研究に対する便宜供与
 - 9 フェローシップの企画および斡旋
 - 10 研究会・講習会の開催
 - 11 国際会議・シンポジウムの開催
 - 12 その他センターの目的達成に必要な事業
- * 刊行物はすべて英文である

七 昭和三十六年度事業概況

1 国際会議「東アジア研究専門家および研究機関代表者会議」(The International Meeting of Experts and Representatives of Research Institutes in East Asia)

昭和三十六年九月二十八日―十月二日、於東京高輪プリンスホテル(二十八日は東洋文庫で開会式兼センター開所式)

参加者 各国研究機関代表者(日本九名、カンボジア・中華民国・大韓民国・フィリピン・タイ・ヴィエトナム各一名)、専門家八名、内外オブザーバー十六名、その他、総計四十四名。

協議事項

- (1) 東アジア文化研究センターのあり方、並びにその三十六年度の事業計画についての説明及び討議
- (2) 東アジア諸国における東アジア研究の現状及び研究機関に関する情報の交換
- (3) センターの将来の事業計画についての討議

センターは、その事業の開始に当つて、ユネスコおよび日本ユネスコ国内委員会との共同によつて、右の如き国際会議を開いた。その協議の成果は、最終日の討議で採択された結論、(1)研究機関の連絡網の設立、(2)情報の交換、(3)書誌、(4)翻訳並びに出版活動、(5)東洋諸言語の教授、辞書、(6)歴史文書の調査、(7)研究及び調査、(8)国際シンポジウム、(9)研究者の交換、研究者フェローシップ、の九項目の中に織り込まれており、これによつて、センターの今後の事業方針が定められたものといつてよい。なお会議々事録は、季刊「東アジア文化研究」第一巻に収録されている。

2 調査研究

(1) 「東アジア諸国における社会的成層と社会変動に関する国際的調査研究」 (A cross-national research project on social stratification and social mobility in East Asian countries)

上記国際会議における討議と結論にもとずいて生まれたこの企画は、社会学の調査のみならず、ひろく社会科学・人文科学の諸分野を包含する総合的調査であることをその特色とする。この企画を推進するために組織された調査研究専門委員会・同小委員会（何れも委員長尾高東大教授）は、全六箇年計画の第一段階として、三十六年度には、各国に問合せ紙、および基礎的データを回収するための調査紙を配布するとともに、その特別研究委員として、岸本東大教授、平井国学院大学助教授に、東南アジア諸地域の視察調査を依頼した。両委員は、三十七年二月三日より三月十日の間、香港・インド・パキスタン・ビルマ・ヴィエトナム・シンガポール・マラヤ・インドネシア・フィリピン・台湾を廻り、各地の研究者・研究機関についての基礎的予備調査を行った。

(2) 「日本における東アジア研究現状の調査研究」

日本における各大学機関における東アジア研究の、主として教授に関する実態調査並びに、研究組織（団体）の調査を行った。前者は「季刊東アジア文化研究」（昭和三十七年度）に分割掲載の予定であり、後者の一部は「内外研究機関一覧」に掲載された。

3 機関誌「East Asian Cultural Studies」(季刊)の発行

この機関誌は、東アジア研究に関する情報を速報する季刊誌である。三十六年度では、第一巻合併号として、上記国際会議の議事録および会議資料を収載した。(B5判、一六〇頁)

4 出版活動

(1) 東アジア文化研究の現状に関する編集と出版

* Research institutes for Asian studies in Japan: Directories No. 1 (A5判、一二〇頁)

国内研究所九六を、総記・哲学・心理学・宗教・歴史考古学・民族学・政治法律・経済・統計・社会学・教育・美術・言語の十二項に分類して、各機関の東アジア研究に重点をおいてそれぞれ記述した。

* Recent trends of East Asian studies in Japan with bibliography (A5判、三四〇頁)

左記の分野毎に、日本における東アジア研究の戦後の動向を略述し、主要文献目録を附してある。

中国哲学(附金石学)・倫理学・宗教学(附仏教学)・先史考古学・日本史・東アジア史・地理学・政治学・法学・経済学・社会学・文化人類学・美術・日本語・中国語学・その他の言語学・日本文学・朝鮮文学・中国文学・東南アジア文学

(2) 東アジア文化研究の普及に関する図書の編集と出版。

* The formation of modern Japan as viewed from legal history, by NAKAMURA Kichisaburo (East

Asian Cultural Studies Series Nos 1,2) (B5判、一二八頁)

* East Asia in old maps, by NAKAMURA Hiroshi (East Asian Cultural Studies Series No. 3)

(B5判、八二頁)

* General history of Japanese literature, by HISAMATSU Sen'ichi (編集のみ、出版は三十七年度)

5・地域外資料目録の作成

一橋大学・天理大学等所蔵の左記のオランダ語文献資料のマイクロフィルム撮影を完了した。

A) 一橋大学所蔵

Isaac Commelin; Begin ende Voortgang van de Vereenigde Neederlandsche Geocroyeerde Oost-Indische Compagnie. Amsterdam, 1646, 2 vols.

B) 天理図書館所蔵

J. A. Grothe; Archief voor de Geschiedenis der Oude Hollandsche Zending. 1884—91, 6 vols.

Daghregister gehouden int Casteel Batavia, 1682, I.

Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kundten en Wetenschappen. Deel. 35, 39, 41 stuk 3, 52.

Maauderigten voorgelezen in de maandelijksche bedestonden van het Neederlandsche Zending Genootschap, betrekkelijk de uitbreiding van het Christendom, bijzonder onder de Heidenen, 1817—1831. 8 vols.

A. Duinen; Overzicht van de literatuur betreffende de Molukken, 2 vols.

C) 個人所蔵

Daghregister gehouden int Casteel Batavia, 1682, II.

Realia; Register op de Generale Resolutiën van het Kasteel Batavia, 1602—1805. 3 vols.

S. van Deventer ; Bijdragen tot de kennis van het Landelijk Stelsel op Java. 3 vols.

F. Fokkens ; Eindresumé van het Onderzoek naar de Verplichte Diensten der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera. 5 vols.

6・研 究 会

昭和三十六年七月十九日

「オランダにおける東アジア研究の現状」

ライデン大学 F・フオス氏

7・講 習 会

昭和三十六年七月二十日～八月三十日

ベトナム語講習会

講師 東京大学助教授 三根谷徹氏

他 二 氏

東アジア各国語の短期集中講習計画の第一年度として行われた。

8・外国人研究者への便宜供与

今年度は特に、国際会議前後、来日せる欧米人研究者に対して、各種の便宜供与を行つた。

附(二) 東洋學術協會

評議員	石田 幹之助	岩井 大慧	岩生 成一	梅原 末治	榎 一雄
	白鳥 清	末松 保和	辻 直四郎	津田 左右吉	原田 淑人
	三上 次男	山本 達郎	和田 清		
編輯委員	荒松 雄	市古 宙三	衛藤 藩吉	栗原 朋信	河野 六郎
	斯波 義信	関野 雄	中島 敏	坂野 正高	藤井 宏
	藤田 正典	三根 谷徹	村上 正二	守屋 美都雄	箭内 健次
	和田 久徳				
常任委員	池田 温	宇都木 章	榎 一雄	神田 信夫	菊池 英夫
	北村 甫	佐々木 正哉	高島 稔	田中正 俊	鳥海 靖
	永積 昭	西田 守夫	堀 敏一	松村 潤	護 雅夫
	山根 幸夫				
幹事	杉野 純子				

東洋學報四拾四卷第二号——四号目次

第四拾四卷第一号（昭和三十六年九月）

領軍將軍と護軍將軍……………

宋代江南の村市 (market) と廟市 (fair) (上)……………

唐代兩稅・三限放……………

天朝田畝制度をめぐる近年の研究……………

朱嶸・許球の禁煙奏議……………

増淵竜夫著 中国古代の國家と社会……………

林天蔚著 宋代香葉貿易史稿……………

中国科学院上海經濟研究所編 恒豐紗廠的發生發展与改造 他二種……………

吳杰編 中国近代国民經濟史……………

グラマン著 オランダのアジア貿易一六二〇—一七四〇……………

ローゼンタール著 中世イスラムの政治思想……………

トルコ歴史協會編 ベレテン第二十四卷第九十六号……………

東洋文庫におけるチベット研究について……………

越智重明

斯波義信

古賀登

河籬源治

国岡妙子

宇都宮清吉

和田久徳

渡辺惇

菊池貴晴

永積洋子

嶋田襄平

護雅夫

北村甫

第四拾四卷第二号（昭和三十六年十月）

- ウイグル文売買文書における売買担保文書……………護 雅 夫
- 鄭氏攻略をめぐるオランダ東インド会社の対清交渉（一六六二—一六六四）……………永 積 昭
- 節度使制度確立以前における「軍」制度……………菊 池 英 夫
- 宋代江南の村市（market）と廟市（fair）（下）……………斯 波 義 信
- 石璋如著 殷墟建築遺存……………佐 藤 武 敏
- 中国古代史研究会編 中国古代史研究……………影 山 剛
- 列島編 鴉片戦争史論文專集……………田 中 正 美
- 波多野善大著 中国近代工業史の研究……………小 山 正 明
- 蕭公權著 康有為と儒教……………高 田 淳
- 羅家倫著 国父年譜初稿……………野 沢 豊
- 中国人民銀行上海市分行編 上海錢莊史料……………宮 下 忠 雄
- 周策縱著 五四運動……………野 村 浩 一
- オランダにおける東洋学研究の現状……………永 積 昭
- 第四拾四卷第三号（昭和三十六年十二月）
- モンゴル朝治下の封邑制の起源—とへて Soyungnal と Qubi と Fenchü との関連について……………村 上 正 二
- 王才成周考……………後 藤 均 平

明末清初、揚子江中流域の大土地所有に関する一考察

— 湖北漢川県、蕭堯棠の場合を中心として —

安野省三

トルコの表紙装釘について

ケマル・チユール

貝塚茂樹著 京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字本文篇

池田末利

白川静著 稿本詩経研究

山田 統

レング著 中国 経 書

沢谷昭次

ライド著 ロバート・モリソン

星 斌 夫

清史編纂委員会編 清史

小島 晋 治

中国科学院歴史研究所第三組近代史資料編輯組編 太平天国資料

佐々木 正 哉

段光清著 鏡湖自撰年譜

小野 信 爾

パウエル著 清末新軍の興起

藤田 正 典

三上・石川・芝田共訳 湖北秋収暴動経過の報告

松村 潤・護 雅夫・嶋田襄平・本田実信

最近東洋文庫において蒐集せる西アジア地域の諸文献

藤 井 宏

第四拾四卷第四号(昭和三十七年三月)

明初に於ける均工夫と税糧との関係—山根幸夫氏の新説をめぐる諸問題—

草 野 靖

南宋時代淮南路の通貨問題—鉄銭交子の廃復をめぐる—

藤 井 宏

周処風土記輯本	守屋美都雄
「アヴァダーナ」シヤタカについて	岩本裕
均田制の実施情況をめぐる問題点	堀敏一
中国の封建論争	好並隆司
簡又文著 太平天国典制通考	河鱸源治
薛君度著 黄興と中国革命	中村義
吳相湘主編 中国現代史叢刊第一・二冊	菊池貴晴
李能和著 韓国道教史	窪徳忠
シエールカル著 サンスクリット戯典―その起源と没落―	原実
ポールハチット著 西部インドにおける統治政策と社会的変化(一八一七―一八三〇年)	深沢宏
イナン著 歴史上の、及び現在のシヤマニズム―資料と研究―	護雅夫

昭和三十七年十二月二十一日印刷
昭和三十七年十二月二十五日發行

〔非売品〕

財団法人東洋文庫年報

發行者
榎

一
雄

東京都文京区駒込上富士前町一四七

印刷所
株式会社
開明堂

東京都千代田区九段二ノ一

東京都文京区駒込上富士前町一四七

電話
(941) 〇二二九
〇六六八

發行所
財団法人
東洋文庫

〔振替東京六七〇二三番〕

